

あか い がわむら
赤井川村

いた こ や さわ い せき ひ で い せき
板小屋沢遺跡・日の出2遺跡

— 余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成18年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

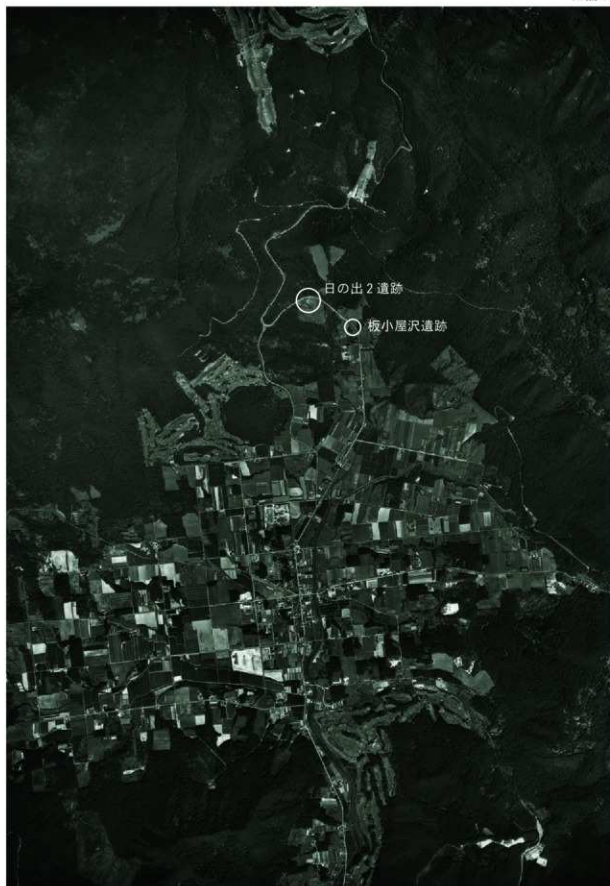
あか い がわむら
赤井川村

いた こ や さわ い せき ひ で い せき
板小屋沢遺跡・日の出2遺跡

— 余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成18年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡周辺の空中写真 2001年8月7日撮影 (国土地理院発行のものを複製したものである)

口絵 2



1 板小屋沢遺跡・日の出2遺跡遠景（冷水峠から）



2 板小屋沢遺跡全景（南から）



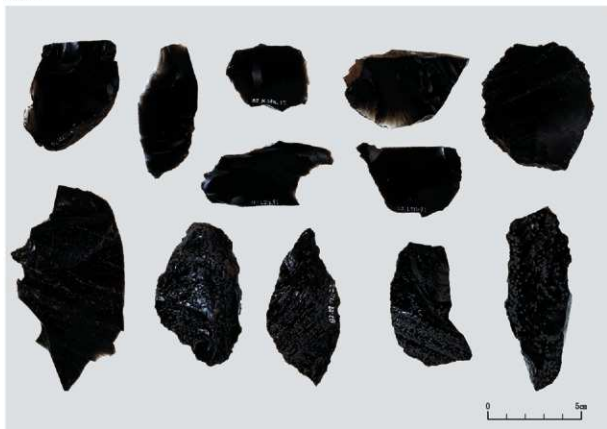
1 日の出2遺跡A地区全景（南西から）



2 板小屋沢遺跡土層断面（北西から）



3 日の出2遺跡土層断面（東から）



1 日の出2遺跡出土黒曜石剥片



2 185号林班線採取の黒曜石原石

例 言

1. 本書は北海道後志支庁小樽土木現業所が行なう余市赤井川線道路改良工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成18年度に調査を実施した赤井川村板小屋沢遺跡・日の出2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査および報告書の作成は、第2調査部第1調査課が行なった。
3. 本書の執筆は板小屋沢遺跡を遠藤香澄、日の出2遺跡を笠原興が分担した。文責は文末に記してある。
4. 写真撮影・現像等の写真業務は笠原が担当した。
5. 調査報告終了後の出土資料および記録類については赤井川村教育委員会が保管する。
6. 調査にあたっては下記の諸機関、各位からご協力、御指導をいただいた。(順不同、敬称略)。
北海道教育委員会、北海道小樽土木現業所、赤井川村教育委員会 大西敏典・木立春幸、赤井川村社会課 菅藤覚史、赤井川村郷土資料館 大原眞一、余市水産博物館 乾芳宏、仁木町教育委員会 嶋井康夫、八洲建設株式会社、辻木材株式会社、茅沼建設工業株式会社、赤井川村 藤門 弘、松沢 彰、高橋鉄男、田村 武、余市町 川端 有

記号等の説明

- 1 実測図の縮尺は、原則として以下のとおりであり、すべてにスケールをつけている。
遺構 1:40 土器拓本 1:3 剥片石器 1:2 礫石器 1:3
- 2 遺構図中の方位は真北を示す。遺構平面図の+は小グリッドラインの交点で、傍らの名称記号は右下の小グリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。
- 3 遺構の規模については以下の要領で示した。
確認面での長軸長×短軸長/底面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深・最大厚（単位m）
- 4 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。
- 5 土層説明には『新版標準土色帳19版』（小山・竹原1997）と『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編1997）を引用した。
- 6 石器等の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」（単位cm）で示した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、破損しているものについては現存最大値を（）で示した。
また、実測図中でたたき痕は「V-V」、すり痕は「| - |」で範囲を表した。

目次

口絵

例言

記号等の説明

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 調査の概要

- 1 調査要項……………1
- 2 調査体制……………1
- 3 調査に至る経緯……………1
- 4 調査の概要……………4
 - (1) 板小屋沢遺跡……………4
 - (2) 日の出2遺跡……………5

II 遺跡の位置と環境

- 1 位置と環境……………7
- 2 周辺の遺跡……………8

III 調査の方法

- 1 発掘区の設定……………13
- 2 整理の方法……………15
- 3 遺物の分類……………16
 - (1) 土器……………16
 - (2) 石器等……………16

IV 板小屋沢遺跡の調査

- 1 発掘調査の方法……………17
- 2 基本土層……………17
- 3 包含層出土の遺物……………20
 - (1) 土器……………20
 - (2) 石器等……………20

V 日の出2遺跡の調査

- 1 発掘調査の方法……………23
- 2 基本土層……………25
- 3 遺構と遺構出土の遺物……………28
 - (1) 土坑……………28
- 4 包含層出土の遺物……………30
 - (1) 土器……………30
 - (2) 石器等……………33

VI 小括

- 1 日の出2遺跡出土のスクレイパーと剥片について……………45
- 2 185号林班線採取の黒曜石原石について……………46

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

I 調査の概要

図I-1 遺跡の位置……………2

図I-2 遺跡周辺の地形と調査区……………3

II 遺跡の位置と環境

図II-1 周辺の遺跡(1)……………8

図II-2 周辺の遺跡(2)……………9

図II-3 「日本で最も美しい村」連合の
シンボルマーク……………12

III 調査の方法

図III-1 板小屋沢遺跡の発掘区設定図……………13

図III-2 調査範囲および発掘区設定図……………14

図III-3 日の出2遺跡の発掘区設定図……………15

IV 板小屋沢遺跡の調査

図IV-1 基本土層模式図……………17

図IV-2 最終面の地形と礫の様相
(IV層上～中位)……………18

図IV-3 K～N17ラインの土層断面……………19

図IV-4 K13・14ラインの土層断面……………20

図IV-5 包含層出土の土器……………21

図IV-6 包含層出土の石器等……………21

図IV-7 包含層出土遺物の分布……………22

V 日の出2遺跡の調査

図V-1 最終面の地形と遺構位置図……………24

図V-2 基本土層模式図……………25

図V-3 I35～K33土層断面……………26

図V-4 A地区斜面下部の礫の様相と地形図
(IV'層上位)……………27

図V-5 P-1・2・3と出土遺物……………29

図V-6 包含層出土の土器……………30

図V-7 土器の分布(1)……………31

図V-8 土器の分布(2)……………32

図V-9 包含層出土の石器(1)……………35

図V-10 包含層出土の石器(2)……………36

図V-11 包含層出土の石器(3)……………37

図V-12 包含層出土の石器(4)……………38

図V-13 石器の分布(1)……………39

図V-14 石器の分布(2)……………40

図V-15 石器の分布(3)……………41

図V-16 石器の分布(4)……………42

VI 小括

図VI-1 185号林班線位置図……………46

表 目 次

I 調査の概要

表 I-1 板小屋沢遺跡出土遺物一覧…………… 6

表 I-2 日の出2遺跡出土遺物一覧…………… 6

II 遺跡の位置と環境

表 II-1 周辺の遺跡一覧(1)……………10

表 II-2 周辺の遺跡一覧(2)……………11

IV 板小屋沢遺跡の調査

表 IV-1 包含層出土掲載石器一覧……………21

表 IV-2 包含層出土掲載石器等一覧……………22

V 日の出2遺跡の調査

表 V-1 検出遺構一覧……………43

表 V-2 遺構出土掲載石器一覧……………43

表 V-3 包含層出土掲載石器一覧……………43

表 V-4 包含層出土掲載石器等一覧……………43

図 版 目 次

口絵1 遺跡周辺の空中写真 2001年8月7日
撮影

口絵2 1 板小屋沢遺跡・日の出2遺跡遠景
(冷水峠から)

2 板小屋沢遺跡全景(南から)

口絵3 1 日の出2遺跡A地区全景
(南西から)

2 板小屋沢遺跡土層断面(北西から)

3 日の出2遺跡土層断面(東から)

口絵4 1 日の出2遺跡出土黒曜石剥片
2 185号林班線採取の黒曜石原石

板小屋沢遺跡

図版1 1 板小屋沢遺跡調査前状況(西から)
2 板小屋沢遺跡調査状況(南から)

図版2 1 板小屋沢遺跡K17土層断面
(北西から)

2 板小屋沢遺跡L17土層断面
(北西から)

3 板小屋沢遺跡M17土層断面
(北西から)

4 板小屋沢遺跡N17土層断面
(北西から)

図版3 1 板小屋沢遺跡K13・K14土層断面
(南西から)

2 板小屋沢遺跡完掘(南東から)

図版4 1 板小屋沢遺跡包含層出土の土器

2 板小屋沢遺跡包含層出土の石器等
日の出2遺跡

図版5 1 日の出2遺跡A地区調査前全景
(南西から)

2 日の出2遺跡A地区調査状況
(南から)

図版6 1 日の出2遺跡A地区調査状況
(東から)

2 日の出2遺跡A地区G29遺物出土
状況(西から)

図版7 1 日の出2遺跡A地区トレンチ
(東から)

2 日の出2遺跡A地区K33土層断面
(東から)

3 日の出2遺跡A地区J34土層断面
(東から)

4 日の出2遺跡A地区I35土層断面
(東から)

図版8 1 A地区P-1土層断面(北から)
2 A地区P-1完掘(北から)

3 A地区P-2土層断面(北から)
4 A地区P-2完掘(北から)

5 日の出2遺跡A地区完掘(東から)

図版9 1 日の出2遺跡B地区全景
(南東から)

2 日の出2遺跡B地区K19遺物出土

		状況（東から）	2	185号林班線から工藤沢をみる
図版10	1	日の出2遺跡C地区調査前状況 （東から）	3	185号林班線黒曜石原石採取状況
	2	日の出2遺跡C地区調査状況 （東から）	4	黒曜石原石
図版11	1	C地区P-3土層断面（北東から）	図版13	1 包含層出土の土器
	2	C地区P-3完掘（東から）	2	P-3出土の石器
	3	日の出2遺跡C地区完掘 （南東から）	3	包含層出土の石器（1）
図版12	1	185号林班線	図版14	1 包含層出土の石器（2）
			図版15	1 包含層出土の石器（3）
			図版16	1 包含層出土の石器（4）

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	：余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委託者	：北海道後志支庁
受託者	：財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	：板小屋沢遺跡（道教委登載番号D-20-1）
遺跡名	：日の出2遺跡（道教委登載番号D-20-6）
所在地	：板小屋沢遺跡 余市郡赤井川村字日の出197-56ほか ：日の出2遺跡 余市郡赤井川村字日の出313-4ほか
調査面積	：板小屋沢遺跡： 600㎡ ：日の出2遺跡： 2,400㎡
受託期間	：平成18年6月1日～平成19年3月31日
調査期間	：平成18年7月3日～平成18年9月29日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	
理事長 森重 橋一	第2調査部長 西田 茂
専務理事 佐藤 俊和	第1調査課長 遠藤 香澄（発掘担当者）
	主 査 笠原 興（発掘担当者）

3 調査に至る経緯

平成14年8月に、北海道後志支庁小樽土木現業所より「道道余市赤井川線」改良事業に伴い、北海道教育委員会教育長あてに埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。この道路は余市町を基点として冷水峠を経由し村内を縦断しており、岩内・積丹方面をはじめ、札幌・小樽圏に接続する産業や観光の幹線道路として重要な役割を担ってきた。この道路の整備目的は、倶知安・赤井川間の開通等に伴い、大型車両等の増加や冬季間の安全確保などから、危険な急カーブを抱える冷水峠をトンネル化し、線形改良や拡幅整備をする事で安全確保と交通緩和、さらには地域の活性化を実現しようとするものである。この計画を受けた北海道教育委員会（以下道教委）では平成14年10月に「所在確認調査」を実施した。この結果に基づいて工事計画用地内の「範囲確認調査」が必要と判断されたことから、平成15年9月に調査面積17,900㎡を対象として試掘調査が行なわれた。調査は約0.75×2 mのトレンチ状テストピット41か所を設けて行った。その結果、テストピット23か所から遺物が出土し、周知の板小屋沢遺跡（D-20-1）からは散発的に遺物が出土した。過去の農地造成等で遺物包含層が消失した範囲が多いものの、一部に遺物包含層が残存している部分も認められた。また、ほぼ隣接する周知の日の出2遺跡（D-20-6）からはほぼ全域で黒曜石の剥片が出土し、一部に遺物包含層が残存していることが解った。しかし、耕作や植林により遺物包含層が消失した範囲もある。

この結果から小樽土木現業所から道教委へ包蔵地附近の詳細な工事設計を添えた協議文書が提出された。これをうけた道教委は板小屋沢遺跡については600㎡の発掘調査が必要であり、日の出2遺跡については1,400㎡の発掘調査が必要であるとの判断を示した。また、日の出2遺跡については広範

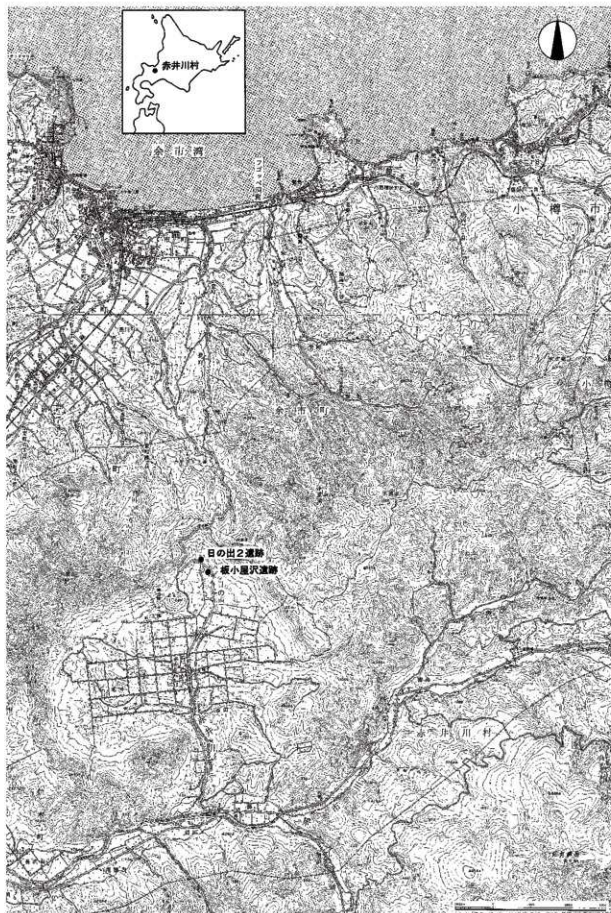


図1-1 遺跡の位置

(この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図「小樽西部」と「仁木」を複製したものである)

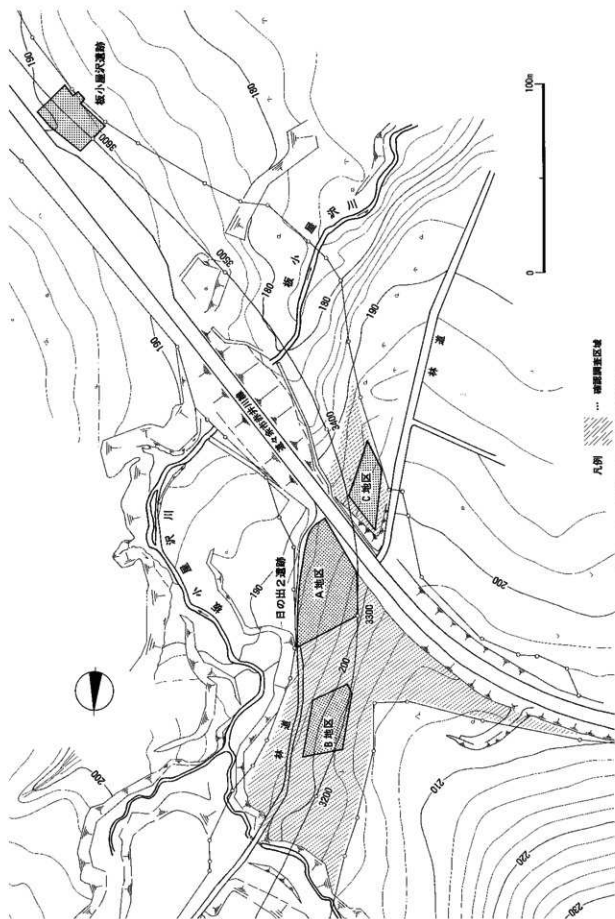


図1-2 道跡周辺の地形と調査区

囲で遺物が出土したものの、包含層の残存状態から発掘調査範囲が限られることなどから、調査対象面積10,000㎡のうちの約10%程度を調査し、遺跡の内容を確認する事が必要であるとの旨を小樽土木現業所に回答した。以上の協議結果を受けて、小樽土木現業所は道教委に対して早期に両遺跡の発掘調査実施を要望し調整が重ねられてきた。道教委と土木現業所の間では、平成17年度に発掘調査を実施するべく調整が行なわれていた。平成16年には「道路構造令」が改正され、全国画一的であった道路構造が、法令を弾力的に運用することにより地域に適した構造とすることが可能となった。

土木現業所では「道道余市赤井川線」設計の再検討を行なった。この結果、当初の計画とは異なるルート案が浮上し、新たに比較検討および協議が実施される状況となった。これにより平成17年度の調査実施は困難と判断され、文化課あとその旨が通知された。その後、平成18年度に両遺跡の発掘調査を（財）北海道埋蔵文化財センターが受託する運びとなった。発掘調査は平成18年7月3日から行い、工事用道路の都合等から板小屋沢遺跡の一部と日の出2遺跡の林道脇については先行して調査を行なった。なお、日の出2遺跡については主体部となる1,400㎡部分をA地区、隣接する確認調査区の600㎡部分をB地区、道道余市赤井川線を挟んだ急斜面部の確認調査区400㎡をC地区と呼称した。なお、日の出2遺跡の確認調査区1,000㎡の設定についてはV章に記した。これらの調査はすべて9月29日に終了した。調査終了後の10月2日から工事用重機による埋め戻し作業を行ない、10月13日に小樽土木現業所事業部事業課の担当者立ち会いのもと引き渡しを行なった。これをもって余市赤井川線道路改良工事に関わる両遺跡の発掘調査は終了した。（笠原興）

4 調査の概要

(1) 板小屋沢遺跡

調査の経過

赤井川村の遺跡踏査は1950年代後半に始まる。このうち板小屋沢遺跡はいち早く登載された遺跡として知られている（表Ⅱ-1）。板小屋川は赤井川村域の北西部に形成された「赤井川カルデラ」壁から流れ出て、その裾野を深く解析しながら南下し日の出川と合流する小河川である。遺跡は赤井川村市街地北方のおよそ4kmの日の出地区にあり、板小屋川東岸の標高170～230mの段丘とそれに続く傾斜地一帯に広がっている。包蔵地は南北に750m、東西に260mほどの範囲であり、現況は山林、牧草地、畑地である。川を挟んだ西側が日の出2遺跡である（図Ⅱ-1）。

今年度の調査地点は包蔵地範囲のほぼ中央部、「道道余市赤井川線」に面した標高187～190mの南西向き緩斜面である（図Ⅱ-2）。調査面積は600㎡で、調査前の状況は荒地であったが、以前は畑地および一部が作業用通路として利用されていた。すぐ南西側に隣接して果樹農場があり、昭和51（1976）年に木村英明らが踏査し、土器（時期不詳）、先土器時代の石器が採集された地点、LOC.3とLOC.4（木村1978）はこの農場内およびこれにつづく草地内にあるとみられる。

調査に先立ち、6月中旬から工事用重機により表土等の除去作業を行い、この段階で隣接する農場の果樹への土埃を防ぐため調査区との境界に防塵ネットを設置している。その後、業者に委託し測量、基準杭の打設を行った。平成15年秋に実施された北海道教育委員会の試掘調査の報告では、遺物の出土が散発的であること、遺物包含層は一部にのみ残存することであった。表土層を除去した段階で、本来的な遺物包含層であるⅡ層は調査区北側のやや窪みとなった範囲（K～L12～14）と南～東側の一部にのみ残存し、ほかの区域では耕作によりそのほとんどが削平された状況であることが分かった。また、調査委託者である小樽土木現業所より、調査区南東側の約200㎡について7月末までの終了要請があったことから、遺物の濃淡を確認する「25%調査」は行わずに「15～17ライン間」を先行

して調査することとし、7月10日から包含層調査を開始した。

斜面下部のⅢ層中、およびⅣ層のほぼ全域からは崖堆積物である安山岩の亜円礫～亜角礫が検出された(図Ⅳ-2)。礫は大小様々な大きさで、乱雑な堆積状況であり、とくに斜面下部(N16区周辺部)ではⅣ層中～下部から長径30cmを越す巨岩が検出された。遺物の出土量はあまり多くはないが、このように礫が多く土壌が硬くしまっていることから作業が進まず、予定よりも10日ほど遅れて8月11日に「15～17ライン間」の調査を終了した。なお、傾斜に沿って17ラインに幅1m、長さ18mのトレンチ(図Ⅳ-2)を設けⅣ層を1m～1.4mほど掘り下げたが、遺物は検出されなかった。全体の発掘調査は8月24日に終了した。その後、日の出2遺跡の調査終了を待って10月2日から準備段階で除去した土により調査範囲の埋め戻し作業を行ない、完了後の10月13日に委託者に引き渡した。引き続き10月より江別市にある埋蔵文化財センター事務所では整理作業を開始した。

調査結果の概要

表土からの回収した分を含め、土器が13点(Ⅱ層)、石器等が446点(内訳Ⅰ層:191点、Ⅱ層:48点、Ⅲ層:47点、表採:160点)、合計459点である。土器はいずれもⅡ層中で、近接する3か所から出土した。これらは縄文中期中葉(Ⅲ群a類)の萩ヶ岡2式(高橋ほか1982)相当のものと、胎土、焼成等の共通性から同じく中期の可能性が高いもので、四個体に相当する破片である。

石器等の大半はフレイクで、縄文時代に属するものと判断される。内訳は石礫2点、石錐1点、石核3点、Rフレイク24点、Uフレイク3点、フレイク412点、礫1点である。剥片石器、剥片はいずれも黒曜石で、肉眼観察ではすべて赤井川産である。遺構は検出されていない。(遠藤香澄)

(2) 日の出2遺跡

調査の経過

調査に先立ち、小樽土木現業所より日の出2遺跡(A地区)に並行する林道については、工事用道路として資材運搬等の通行に使用するため、7月中旬に林道脇約300㎡について調査の要請があった。このため、6月中旬より立木の伐採、抜根および工事用重機による表土除去作業をA地区から順に行なった。抜根については遺物包含層のダメージを考慮し、根の浅い白樺のみを抜根し、根の深い唐松については残した。唐松は植林によるものでC地区が最も多い。表土除去終了後、調査区の測量、杭の打設を業者に委託した。道教委文化課の試掘調査によれば、調査区のほぼ全域がⅠ層(表土)とⅢ層(黄褐色粘土)で構成されており、A地区の一部に暗褐色土が認められるとのことであった。このことから、包含層の残存状態や遺構、遺物の詳細な分布を把握するための25%調査を林道脇から着手し、その後林道脇約300㎡について先行して調査を行なった。

その結果、A地区は標高約201mから198mの傾斜地であるために、低位の林道脇が最も層厚がある。Ⅰ層とⅢ層の間には暗赤褐色土のⅡ層が堆積していることも判明した。このⅡ層はほぼⅠからGラインにかけて顕著に認められ、Jラインから西側では認められない。このⅡ層中から縄文時代中期と考えられる土器片が僅かに出土している。今回の調査で確認された包含層はⅠ層とⅡ層で、遺物の主体である黒曜石の剥片や砕片はほぼⅠ層からの出土である。A地区とB地区のJラインより西側では深度耕作痕も認められ、Ⅰ層がほぼ水平に削平された部分も土層断面にて観察された。急がれていた林道脇約300㎡の調査は7月下旬に終了し、引き渡しを行なった。その後、調査区南西端にトレンチを設け土層の堆積状況を把握するためのトレンチ調査も行なった。A地区の調査終了後は隣接するB地区の調査を行なった。B地区は遺構確認区であるために、表土除去の段階でⅢ層上面(黄褐色粘土)

まで工事用重機で掘削した。その際、可能な限り遺物の採取は行なった。C地区もB地区同様で確認調査区であるが、かなりの急斜面であることと、唐松の根が非常に多い事等から重機による表土除去には限りがあった。このために主に人力に頼り調査を行うこととなった。重機で掘削できない唐松の根の周りにはI層が残されていることもあって、C地区ではより多くの黒曜石の剥片や砕片を採取することができた。

調査結果の概要

検出した遺構はA地区から土坑2基、C地区から土坑1基である。これらは標高約195mから197m附近で検出された。A地区で見つかった土坑2基（P-1・2）はいずれも小型で遺物等はない。

C地区南端で検出したP-3は、開口部の形状が楕円形で、開口部・深さともに約110cmを計り、坑底部には溝状の凹みがある。覆土中から黒曜石の剥片が出土している。確認面のレベル等から縄文時代以降のものである事が考えられる。

遺物は各地区とも黒曜石の剥片や砕片が主体で、ほぼ全域から出土している。A地区では特にG29グリッド附近でまとまって出土し、B地区ではK19グリッド周辺から集中して出土した。斜面地形による流れ込みの影響で林道側に集中している。定形石器は少なく石鏃が9点、石槍・ナイフ4点、石錐4点、スクレイパー12点、Rフレイク80点、Uフレイク23点、石核55点等である。これらは赤井川産の特徴である球顆を多く含む縞状に列をなすもの他に、球顆が少なく漆黒の良質なものも数多くある。礫石器が少ない事も特徴の一つである。明らかに旧石器時代の遺物と判断できるものはない。土器は、縄文時代早期と中期、後期の土器片が出土している。（笠原）

表I-1 板小屋沢遺跡出土遺物一覧

	土器	石 器 等							合 計
		III群	石 鏃	石 錐	Rフレイク	Uフレイク	石 核	黒 曜 石 剥片・砕片	
包含層									
I層			1	13	2	1	174		191
II層	13	2		5	1		39	1	61
III層				5			42		47
表 採			1		2		157		160
合 計	13	2	1	24	3	3	412	1	459

表I-2 日の出2遺跡出土遺物一覧

	土 器	石 器 等											合 計						
		I群	III群	IV群	不明	石 鏃	石 槍・ナイフ	石 錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石 核		原 石	たたき石	合 石	黒 曜 石 剥片・砕片	礫	粘 土 塊
包含層																			
I層	1	22	1	25	8	2	2	10	69	19	47	12	4	1	30142	29	9	30403	
II層	7	2		4	1	1	1	1	2	3					1504	2		1528	
III層	14					1		2		1					82		1	101	
遺 構								1							4			5	
表 採						1	1	1	7	2	4	1	1		1538			1556	
合 計	22	24	1	29	9	4	4	12	80	23	55	13	5	1	33270	31	10	33593	

※I群にはI?、III群にはIII?を含む

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

赤井川村は北海道小樽市の南西部に位置し、周囲を札幌市、小樽市、余市町、仁木町、俱知安町、京極町に接している。四方がすべて山に囲まれた盆地状の地形で、火山活動によるマグマ噴出後の火山口源陥没で形成された二重の環状陥没地形を持つ火山性カルデラである（権子1940 太田1954）。これによれば、村の北西部に形成された赤井川カルデラと、外側にあたる余市川カルデラが馬蹄形に連なっている。村域は東西約26km、南北約17km、面積は280.11km²を有し、その8割を山林が占めている。赤井川カルデラの中央部は標高約150m前後と比較的平坦で、市街中心部はここに形成されている。また、村の中心には東西を二分するように北から南に赤井川が流れ、市街地南部で余市川に合流している。余市川は村の南東部にある余市岳に源を発し、西流しながら仁木町銀山付近で北に転じ余市町で日本海に注いでいる。気象条件は盆地特有の内陸型の気候で、冬は積雪が多く夏は気温が高くなる。昼夜の寒暖の差が大きいため果菜類の栽培に適した場所である。

赤井川という地名はアイヌ語のフレベツ「赤い川」の意識によるといわれている（赤井川村2004）。しかし、「水が特に赤いとも聞かない。古い火山地帯で赤土の処が多いからではないか」（山田 1984）という解釈もある。また、近世の資料中に赤井川周辺の確かな地名は見あたらず、松浦武一郎の記録にも当村域にアイヌ語地名は見あたらぬようである。

赤井川村の開拓は明治15年（1882）に山口県人の栗屋貞一、井関百合蔵の両名によって探査が行なわれ、この年山口県から第一次の開拓移民が入植している。しかし翌年には皇室の財産となる御料地が設定され、実際の移民は明治28年（1895）を待たなければならなかった。赤井川村は明治16年に設置された大江村（現 仁木町）に含まれていた。大江村の戸長役場がある仁木町まで歩いて丸一日かかり不便な事から、同32年に赤井川村として分村して戸長役場が設置された。その後、明治39年には2級町村制が施行され、同43年には小樽支庁ほか2支庁の併合による後志支庁の管轄となった。また、余市川の支流の白井川沿いには、上流の轟鉾山から合流点近くの明治鉾山にかけて有用金属を含む鉾石が分布しており、明治から昭和にかけて鉾山が稼働していた。明治10年に発見された明治鉾山は主に銅と水銀を産出し、大正5年には大規模な水銀鉾床が見つかった。明治30年に発見された轟鉾山は主に金・銀鉾を産出し、当初鉾石を共和町の国富鉾山へ運んでいた。大正12年に水力発電所を建設し昭和8年には精錬・選鉾場も作り、一時は千人を超える集落を形成していた。これは当時の村の人口の約三分の一を占めるほどの盛況ぶりであった。これらの鉾山はいずれも戦争を契機に閉山している（赤井川村2004）。

赤井川村は北海道における黒曜石の四大産地の一つとして知られている。今回調査した板小屋沢遺跡・日の出2遺跡は市街地から冷水峠^{ひよみ}方面へ約5kmの地点にある。板小屋川上流域右岸の標高約190mの段丘上に日の出2遺跡があり、調査区内の高低差は約10mを計る傾斜地に立地している。板小屋沢遺跡は左岸段丘から続く緩やかな傾斜地の標高約180mにある。赤井川村の市街地からこの二つの遺跡を通り、冷水峠を越えると日本海に繋がる余市平野が広がっている。途中の丘陵地帯から平野部にかけては多くの遺跡が存在している。今回調査した二つの遺跡は、赤井川から余市平野にいたる峠越えの主要なルートにあったことが考えられる。なお、現在豊かな農村景観が残る赤井川村は「日本で最も美しい村」連合に加盟している（図II-3）。（笠原）

2 周辺の遺跡

赤井川村の遺跡についてその分布を図Ⅱ-1・2、表Ⅱ-1・2に示してある。赤井川村の遺跡は、北海道教育委員会による埋蔵文化財分布調査によると、現在66ヶ所の遺跡が登録されている。このうち、最初に発見されたのが板小屋沢遺跡で、次に館蔵沢遺跡、日の出遺跡、曲川遺跡の順となっている。これらの遺跡は昭和30年代の初め、主に北海道開発局に勤務していた松下亘によって発見されたものである。松下は昭和31年に赤井川村の考古学調査を始め、この調査の中で赤井川村には旧石器時代の遺跡がある事等を明らかにした。このうち、板小屋沢遺跡は昭和32年に北海道大学名取武光と松下亘によって初めての調査が行なわれた遺跡である。また、曲川遺跡は昭和33・34年に名取武光と松下亘の指導のもと、赤井川村教育委員会により2年間に渡って調査が行なわれた。

曲川遺跡は余市川左岸のシュマンベの沢川の段丘上、標高約170mにある。この遺跡は「余市郡赤井川村曲川遺跡調査報告第一報・第二報」（名取・松下 1959・1961）に詳しく報告がされている。

報告によるとこの場所は昭和23年の入植以来、耕作を受けていたために包含層が一部深く攪乱されていた。また、遺跡に至る林道付近には黒曜石の原石が露出しており、人頭大から握り拳ほどのものが多く見受けられたという。調査の結果、出土した遺物は尖頭器石器群を主に、有茎尖頭器や彫刻刀形石器、石核等が出土し、旧石器時代のものであることが明らかになった。現在調査地点には遺跡を示す標柱が草むらの中に立っている。

昭和37年には館蔵沢遺跡の調査が行なわれた。標高は約140～170mの畑地である。発掘担当者は名取武光と松下亘である。概要は赤井川カルデラ内の北丸山山麓にあたる館蔵富顕氏所有の畑地広さ約200坪の範囲に土器や石器の分布がみられた。また、耕作地であったために表面が一部攪乱されていたものの、良好な場所も多く「特に縄文時代早期の貝殻文土器の出土は注目を要する」とされている。



★…今年度調査地点

図Ⅱ-1 周辺の遺跡 (1) (図Ⅱ-2の一部を拡大)



図II-2 周辺の遺跡(2)

(この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「仁木」「赤井川」を複製したものである)

表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧(1)

No.	遺跡名	所在地	立地(標高)	時期	備考・文献
1	板小屋沢	日の出197-6・11	板小屋川左岸の段丘およびそれに続く傾斜地 (170~230m)	旧石器・縄文	S31年松下巨により発見。S32年名取武光・松下巨・峠山蔵調査。木村(1978) H18年遺理文調査 本書
2	館蔵沢	日の出135、136ほか	館蔵沢川左岸の水源地付近北丸山山麓 (140~170m)	旧石器・縄文	S37年名取・松下調査。水源地付近では数箇所に凹地があり遺物が多い。木村(1978)
3	日の出	日の出348、349	板小屋川上流左岸の段丘上およびそれに続く斜面 (198~200m)	旧石器・縄文	木村(1978)
4	曲川	曲川143	余市川左岸シュマンベノ沢川左岸段丘上 (167~170m)	旧石器	S33年名取・松下調査。名取・松下(1959、1961) 木村(1978)
5	都	都69-1、73-1~23ほか	赤井川カルデラ南東壁、余市川と赤井川の合流点東側 (210~217m)	旧石器	上野・宮塚(1976) 木村(1978) H11年遺理文調査 北理調報150
6	日の出2	日の出290-1、291ほか	板小屋川上流右岸の段丘、カルデラの北壁 (200~240m)	旧石器・縄文	木村(1978) H18年遺理文調査 本書
7	日の出3	日の出252-1	板小屋川左岸の段丘上、南に傾斜する面 (200~240m)	旧石器	木村(1978)
8	日の出4	日の出197-3ほか	板小屋川と日の出川の合流点にむかひ張り出す伏状の段丘上。日の出3遺跡の南側 (150~180m)	旧石器 縄文早・中期	木村(1978) H11年遺理文調査 北理調報161
9	日の出5	日の出118-1~4	板小屋川右岸(日の出川との合流点付近)の段丘上 (160~170m)	不明	板小屋川に寄った部分に遺物が散見
10	館蔵沢2	日の出142	館蔵沢川右岸の段丘上、館蔵沢遺跡に西接 (130~150m)	旧石器・縄文	耕作地内に黒曜石剥片が散見
11	赤井川1	赤井川575	丸山川左岸の段丘上、段丘は舌状に突き出たような形状 (150m)	不明	耕作地内に黒曜石剥片が散見
12	日の出6	日の出91	赤井川上流域右岸の段丘上、南西向の緩斜面	旧石器・縄文	木村(1978) 排水路付近に黒曜石剥片が散見
13	日の出7	日の出82	赤井川右岸の段丘上、東側には比較深い沢 (175m)	不明	木村(1978) 槌器・尖頭器様石器・剥片
14	赤井川2	赤井川480-1、485	赤井川左岸の段丘上 (180m)	旧石器	木村(1978) 石刃・尖頭器様石器・剥片
15	赤井川3	赤井川503	赤井川左岸の段丘上。北側の緩斜面 (160~175m)	旧石器・縄文	木村(1978) 尖頭器様石器・土器片・剥片
16	赤井川4	赤井川502	赤井川と竹田の沢川に挟まれた段丘上。赤井川3遺跡に南接 (185m)	不明	木村(1978) 剥片
17	赤井川5	赤井川466-2	赤井川と竹田の沢川に挟まれた段丘上。南斜面 (162m)	旧石器	木村(1978) 彫器・尖頭器様石器・剥片
18	赤井川6	赤井川455-1	赤井川左岸の低位段丘上 (138m)	不明	木村(1978) 耕作地内に黒曜石剥片が散見
19	赤井川7	赤井川551	丸山川右岸段丘上、南へ300m程で赤井川と合流 (145m)	不明	木村(1978) 剥片
20	池田1	池田507-1~4ほか	上中の川左岸段丘上、南北に深い沢 (145m)	不明	木村(1978) 槌器・剥片
21	池田2	池田778-1・2	上中の川左岸段丘上 (192m)	旧石器	木村(1978) 石刃
22	池田3	池田785-1・2	上池田川左岸、舌状段丘上 (183m)	縄文	木村(1978) 石鏃・剥片
23	池田4	池田453-1・2	上池田川左岸、舌状段丘上 (172m)	縄文	木村(1978) 石斧・剥片
24	池田5	池田465-1・2	上中の川右岸、舌状段丘上 (167m)	旧石器	木村(1978) 石刃・剥片
25	池田6	池田35、358	上池田川右岸の段丘上、東斜面 (152m)	不明	木村(1978) 剥片
26	池田7	池田337-1・2、338	上池田川左岸、南方へ舌状に張り出す段丘上	縄文	木村(1978) 土器片・槌器・尖頭器様石器・剥片
27	池田8	池田335-1・2	上池田川左岸、上池田川と池田川の合流点付近の段丘上 (142m)	不明	木村(1978) 剥片
28	赤井川8	赤井川235	共栄の沢川(南)と竹田の沢川(北)に挟まれた段丘上 (165m)	不明	木村(1978) 石鏃・剥片
29	旭丘1	旭丘20、21、36	丸山の北麓、池田川右岸の段丘上 (145~163m)	不明	木村(1978) かつて耕作地内で相当量の黒曜石剥片を採取
30	旭丘2	旭丘9	丸山の北麓、池田川右岸の段丘上池田川と赤井川の合流点付近	不明	木村(1978) 畑地に黒曜石剥片が散見
31	富田1	富田142-1	富田川左岸の段丘上 (145~153m)	旧石器	木村(1978) 細石核・剥片 段丘の西斜面一帯に黒曜石剥片が散見
32	富田2	富田146、148-1・2	富田川左岸の段丘上、東側に沢	旧石器・縄文	木村(1978) 土器片・石刃・彫器・尖頭器様石器・細石核・細石刃等 主体は旧石器

表II-2 周辺の遺跡一覧(2)

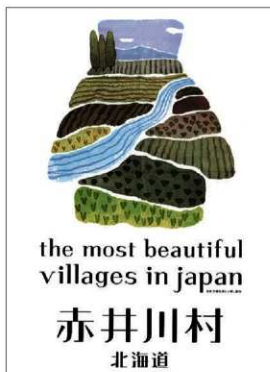
No.	遺跡名	所在地	立地(標高)	時期	備考・文献
33	都 2	富田190、191、192	都遺跡の北方、同一段丘、高位(220~250m)	旧石器	木村(1978) 剥片 道路の切り通しに遺物がある
34	曲川 2	曲川173	余市川左岸(曲川右岸)の段丘上(163~170m)	旧石器	木村(1978) 石刃・彫器・尖頭器様石器 舟底形石器・細石刃・原石等
35	曲川 3	曲川169-1	曲川左岸の段丘上(180m)	旧石器	木村(1978) 石刃・彫器・尖頭器様石器 剥片
36	曲川 4	曲川82、83	土木沢川右岸、余市川に突き出た舌状段丘(145m)	旧石器	木村(1978) 石核・石刃・尖頭器様石器 舟底形石器・細石刃等
37	曲川 5	曲川 3	余市川に注ぐ無名沢の開口部右手段丘上(145~150m)	旧石器	細石刃・石核等
38	日の出 8	日の出235	板小屋川支流の左岸、山麓斜面(160m)	不明	黒曜石剥片
39	日の出 9	日の出101ほか	板小屋川支流の左岸、山麓斜面(160m)	不明	広範囲に多量の黒曜石剥片
40	赤井川 9	赤井川476	竹田の沢川上流の右岸、丘陵上(180m)	不明	黒曜石剥片
41	赤井川10	赤井川371	滝の川上流の右岸、段丘上(165m)	不明	黒曜石剥片
42	赤井川11	赤井川385-1ほか	滝の川上流の左岸、舌状台地上(160m)	不明	黒曜石剥片 遺物が多い
43	赤井川12	赤井川386-5、393	滝の川支流の左岸、段丘上(160m)	不明	黒曜石剥片
44	赤井川13	赤井川417、418-1	丸山川右岸の段丘上(140m)	縄文	竪穴住居跡が存在する可能性あり 土器片等
45	池田 9	池田313-3	中の川支流の左岸段丘上(155m)	不明	黒曜石剥片
46	赤井川14	赤井川137-2ほか	共栄川左岸、段丘上(150m)	不明	黒曜石剥片 遺物が多い
47	赤井川15	赤井川18、19-1ほか	池田川左岸、段丘上(150m)	不明	黒曜石剥片
48	富田 3	富田 9-7	富田川右岸(150m)	不明	黒曜石剥片 遺物が多い
49	富田 4	富田63、66-1	富田川右岸、山麓斜面、小沢入口(170m)	不明	黒曜石剥片
50	富田 5	富田58、59ほか	富田川左岸、丘陵斜面(180m)	不明	
51	富田 6	富田164-4	赤井川左岸、山麓斜面(135m)	不明	石核
52	都 3	都25、26	都2遺跡北側から流れ出す沢の末端部(135m)	不明	黒曜石剥片
53	富田 7	富田90、88	石山東山麓から流出す富田川支流、小沢口(160m)	不明	広範囲に遺物が散見。黒曜石剥片
54	池田 10	池田 7-1、8-1・2ほか	丸山の北麓、池田川右岸の段丘上(160m)	不明	黒曜石剥片
55	赤井川16	赤井川356-1ほか	上中の川右岸(160m)	不明	黒曜石破片が散見。定形的な石器や土器片等は認められない。
56	富田 8	富田 2-5	赤井川左岸(165~175m)	旧石器	剥片
57	赤井川17	赤井川142-5	共栄川右岸(160~170m)	縄文	石核・剥片
58	日の出10	日の出114-1ほか	板小屋川の段丘縁(148m)	旧石器・縄文 早・中・後期	H11年道埋文調査 北埋調報161
59	赤井川18	赤井川565-1、576-2	小沢を挟んだ赤井川遺跡の対岸(151m)	旧石器	剥片
60	赤井川19	赤井川517-6	赤井川左岸、丘陵の緩斜面(150m)	縄文	土器・黒曜石製Rフレイク
61	赤井川20	赤井川14-1	池田川に面した緩斜面(140m)	不明	黒曜石剥片
62	池田 11	池田306-2・7	舌状台地端部の緩斜面(135~140m)	不明	黒曜石剥片
63	赤井川21	赤井川587	滝の川支流水瀬付近(左岸)、緩斜面(165~170m)	不明	黒曜石剥片・石核
64	日の出11	日の出93-1	赤井川左岸の緩斜面(155m)	不明	剥片
65	土木沢	国有林182・190林班	土木沢右岸の尾根(600~640m)	不明	黒曜石剥片
66	旭丘 3	旭丘73-11	余市川右岸台地、緩斜面(150~160m)	不明	黒曜石剥片

(赤井川村2004)。出土した遺物は黒曜石の石核や剥片、削器、石槍、石斧、石冠、石錘等である。ここには湧水地もあって、遺物の散布が最も多いところであった。また、この湧水地附近には数カ所の凹地もあったという。その後、昭和50年には上野秀一・宮塚義人等によって都遺跡の表面採取による調査が行なわれた。都遺跡は余市川を挟んだ曲川遺跡の対岸に位置し、標高は約210～217mの舌状に張り出す台地上にある。遺物の散布する場所は大きく6地点からなり、かなり広範囲にわたって分布することが確認されている。第1・2・4地点は台地上の平坦地に立地し、第3・5・6地点はやや傾斜した南向きの斜面上にある。縄文時代の遺物も出土しているが、石刃や細石刃、搔器、削器、細石刃核等の旧石器時代のものが主体である。翌年の昭和51年には一般調査の成果に基づいて、木村英明らによって発掘調査が行なわれている。この調査では細石刃石器群にかかわる1万点余りの石器等が出土している。

木村は1968年以来、道南部の旧石器文化を明らかにするために10数次に渡る表探調査を行ない、余市川・赤井川流域において40か所を超える遺跡の存在を確認している。これにより赤井川村の遺跡数は大幅に増加した。その後、昭和60年から平成10年にかけて25か所の遺跡が発見されている。

さらに道教委の一般分布調査や赤井川畑総事業による調査、ゴルフ場建設や道道改良工事等により66か所に上る遺跡の所在が明らかになった。平成11年の道道改良工事では、当センターによって都遺跡・日の出4・10遺跡が調査された。都遺跡からは旧石器時代の遺物を始め18万点を超える遺物が出土し、日の出4・10遺跡からは縄文時代早期の貝殻条痕文土器等が出土している(道理文2000,2001)。

赤井川村の遺跡の範囲を見ると、それぞれの遺跡の範囲が隣接しているものも多く、遺物の濃淡の違いはあるがこれらが一つの遺跡になるということも考えられる。黒曜石の供給源と思われる土木沢遺跡周辺の土木川や中の沢川、曲川等では大小の黒曜石の転石を見いだす事が出来る。(笠原)



図II-3 「日本で最も美しい村」連合のシンボルマーク
(赤井川村観光協会企画・発行のパンフレットから複製)

III 調査の方法

1 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては北海道小樽土木現業所の道道余市赤井川線道路改良工事用地平面図（縮尺1：1000）を使用した。

板小屋沢遺跡：基軸線は工事予定中央線のSTA3500とSTA3600を直線で結び、板小屋沢遺跡基準のMラインとした。縦方向の基軸線はSTA3600のMラインと90度直交する線を11ラインに設定した。発掘区は5m×5m方眼とし、北端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称している（例：M12）。

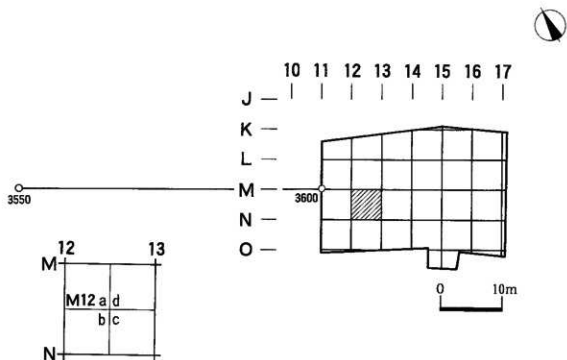
また、調査の必要に応じて5m方眼の発掘区を2.5m方眼に4分割し（小発掘区）遺物の取り上げを行なった。小発掘区は杭のある側（北端）から反時計回りにa, b, c, dを付し「M12a」のように呼称した（図III-1）。センターラインは真北から西へ約N-59°-Wである。

この方眼の平面直角座標は第XI系で以下のとおりである。（世界測地系による）。

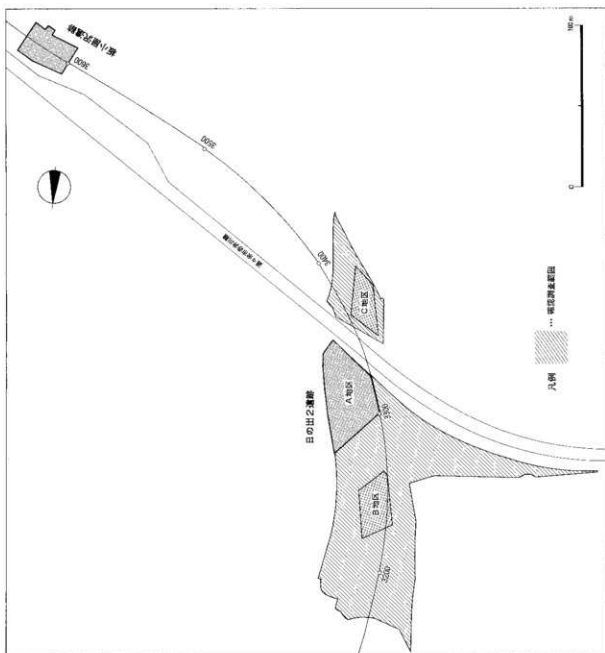
板小屋沢遺跡：

STA.3500 X=-98835.689 Y=46439.872

STA.3600（調査区杭番号M-11） X=-98887.207 Y=46525.566



図III-1 板小屋沢遺跡の発掘区設定図



図III-2 調査範囲および採掘区設定図

日の出2遺跡：基軸線は工事予定中央線のSTA3200とSTA3300を直線で結び、日の出2遺跡基準のMラインとした。縦方向の基軸線はSTA3300のMラインと90度直交する線を30ラインとした。

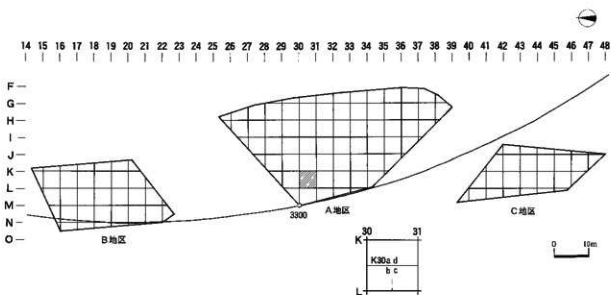
発掘区は5m×5m方眼とし、北端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称している(例：K30)。小発掘区の設定等も板小屋沢遺跡と同様である。日の出2遺跡センターラインは真北から西へ約N-1°-W傾いている。

この方眼の平面直角座標は第XI系で以下のとおりである。(世界測地系による)。

日の出2遺跡：

STA.3200 X=-98577.362 Y=46325.115
 STA.3300 (調査区杭番号M-30) X=-98676.705 Y=46327.178

(笠原)



図III-3 日の出2遺跡の発掘区設定図

2 整理の方法

出土した遺物は取り上げ後、水洗して、大まかな分類を行ない遺物台帳・遺物カードを作成した。遺物台帳は基本的に小発掘区毎に作成している。台帳整理が終了したのから随時注記作業を行なった。土器片・石器・遺構出土遺物については遺跡名の略号「板コヤ」・「日2」、発掘区または遺構名、遺物番号、出土層位を記した。

現地調査終了後の室内整理作業では、遺物台帳、カードの点検、台帳の補正等を行なった。土器については個体識別、接合、拓本、実測および作図、集計、記録類の整理等を行なった。

石器等についても分類の見直しを行ない、遺構、包含層、器種別に収納し、必要な計測、属性観察を行なった。今回出土した石器のほとんどが剥片や砕片であるが、可能な限り接合作業も行なった。

また、定形的なものや加工痕の明瞭なもの等を選択して実測を行い、報告書掲載石器に限り機能部にはこだわらず最大長・最大幅・最大厚・重量について計測した。

整理作業終了後の収納は、報告書掲載のものとはそれ以外のものに分けて行なった。報告書掲載のものは図版に対応するように小分けして収納し、それ以外のものは分類毎に遺構別あるいは包含層の場合は発掘区の単位別に分け収納した。

(笠原)

3 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期をⅠ群、前期Ⅱ群、中期Ⅲ群、後期Ⅳ群、晩期Ⅴ群とした。今年度の調査では板小沢遺跡からはⅢ群が、日の出2遺跡からはⅠ群、Ⅲ群、Ⅳ群が出土している。a類が前半期あるいは前葉、b類が後半期あるいは中葉、c類は後葉である。

Ⅰ群土器 縄文時代早期に属する土器群

a類：貝殻沈線文系、貝殻条痕文系の尖底、平底土器群

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文等が施された、東鋼路式系の土器群

Ⅲ群土器 縄文時代中期に属する土器群

a類：円筒土器上層式などに併行する土器群

b類：円筒土器に後続する土器群

Ⅳ群土器 縄文時代後期に属する土器群

a類：余市、入江式等に相当するもの

b類：手稲、鯨潤式等に相当するもの

c類：堂林、三ツ谷、御殿山式に相当するもの

(2) 石器等

石器は器種別の大分類にとどめ、記号等による細分類は行っていない。石器は遺跡内で出土したのに対してその器種の名称と定義を述べることとし、以下に記した。なお、今回の調査では黒曜石製の剥片や碎片が主体で全体の99%を占める。

石磯

剥片を素材とし、押圧剥離によって両面調整された尖頭形を呈する5cm未満のもの。

石槍またはナイフ

剥片を素材にし、押圧剥離によって両面調整された尖頭形を呈する5cm以上のもの。

石錐

剥片を素材にし、端部に錐状の突出部を有するもの。

スクレイパー

剥片を素材にし、側縁に調整剥離面が連続して加えられたもの。

Rフレイク

剥片を素材にし、加工痕のみられる不定形なもの。

Uフレイク

剥片を素材にし、使用痕のみられる不定形なもの。

剥片・碎片（フレイク・チップ）

石核あるいは石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

石核

石器の素材になりえる大きさで、形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

たたき石

礫を素材にし、敲打痕があるものの中で、能動的と考えられるもの。

台石・石皿

擦り痕もしくは敲打痕があるものの中で、受動的と考えられるもの。

(笠原)

IV 板小屋沢遺跡の調査

1 発掘調査の方法

今年度の調査地点は板小屋川の東岸、「道余市赤井川線」に面した南西向き⁵²⁵²³の緩傾斜で、標高は187～190mである(図Ⅱ-1)。工事用重機により表土層を除去後、鋤簾で全域を精査し調査前の遺跡の状況を撮影した。遺物の検出が少ないことが予想されたこと、および礫が混じる土壌が非常に強く締まっていたことから、移植ゴテと併用し、剣先スコップと鋤簾を使用して掘り下げを行い、Ⅱ層が残る範囲は極力、移植ゴテのみを使用することとした。工事工程の都合上、15～17ライン間を先行して調査することとなったため、遺物の濃淡を確認する「25%調査」は省略し、斜面上部から順次調査を開始した。また、17ラインに沿って幅1m、長さ18mのトレンチを設けⅣ層を1～1.5mほど掘り下げ調査し、遺物の有無を確認した(図Ⅳ-2)。遺物は層位毎、小グリッド単位で取り上げている。

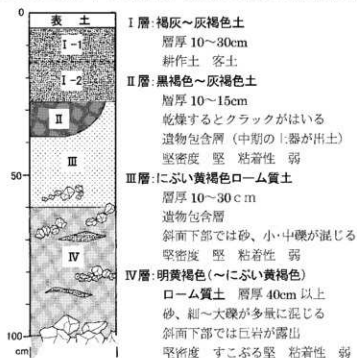
なお、調査の経過を含めた「調査の概要」はⅠ章、「発掘区の設定」はⅢ章でそれぞれ触れてある。

2 基本土層

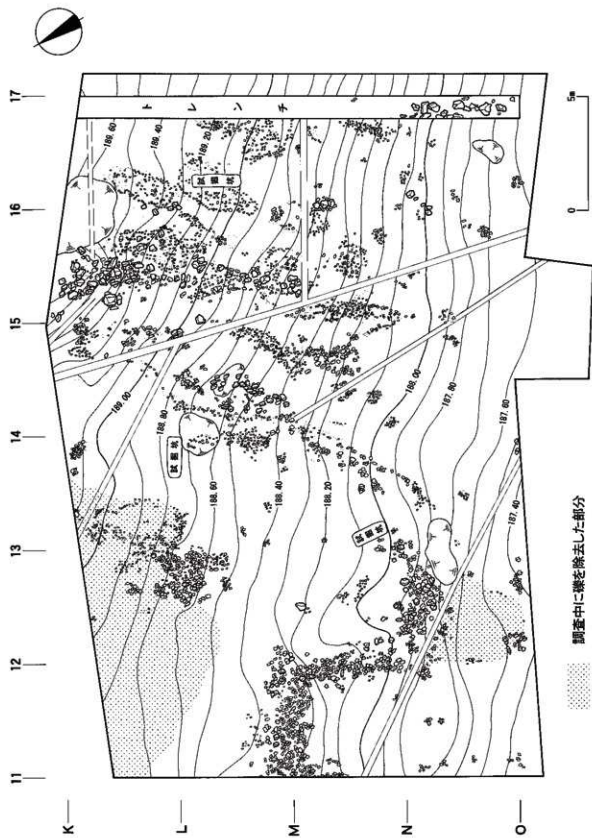
土層の堆積状態については、概ね南北方向(a-b)と東西方向(c-d)の2か所で観察した(図Ⅳ-3・4)。土層は4つに分けられ、これをⅠ～Ⅳ層とした(図Ⅳ-1)。本来的な遺物包含層はⅡ層およびⅢ層である。Ⅱ層は調査区北東側のやや窪みとなった部分(K・L12～14)と東～南側に残存することが分かったが、ほかではほとんどが削平されていた。さらに斜面上部と下部では埋没黒土の影響かと見られるが、部分的に色調が異なることから分層している。また、斜面下部のⅢ層、Ⅳ層中には砂と大小様々な大きさの礫が多量に認められた。構成する礫は安山岩の角礫～亜角礫である。これらは背後の山地から供給された崖堆積物で、礫の分布の方向は斜面方向にほぼ一致している。堆積状況は乱雑で、岩屑の崩落と堆積が幾度となく繰り返されたことが分かる。とくに斜面下部(N16区周辺)ではトレンチによりⅣ層を80cmほど掘り下げた段階で、長径が30cmを越す岩塊が検出された。混入する礫の大きさや様相から、Ⅲ層は①・②、Ⅳ層は①～⑯に分けた。なお、Ⅳ層-②・③のように、極小の砂や細礫がラミナ状や帯状に堆積する層は、流水の影響を受けている可能性が高い。

図Ⅳ-2は一部除去した区域(図の網かけ)もあるが、最終面(Ⅳ層上～中位面)の地形と礫の様相である。縦横の溝は暗渠や側溝跡である。土層注記に用いた石礫の大きさは『土壌調査ハンドブック(改訂版)』(日本ペトロロジー学会編1997)を参照したもので以下の通りである。

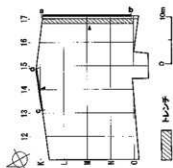
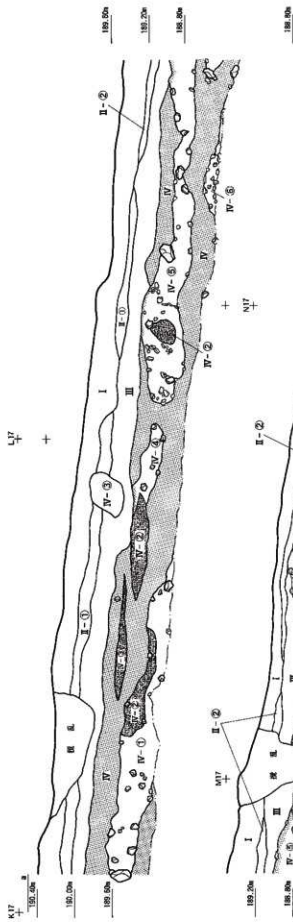
「細礫0.2～1cm」 「小礫1～5cm」
 「中礫5～10cm」 「大礫10～20cm」
 「巨礫20～30cm」 「巨岩30cm超」
 (長径を基準とする)



図Ⅳ-1 基本土層模式図



図IV-2 最終面の地形と礫の様相 (IV層上~中位)

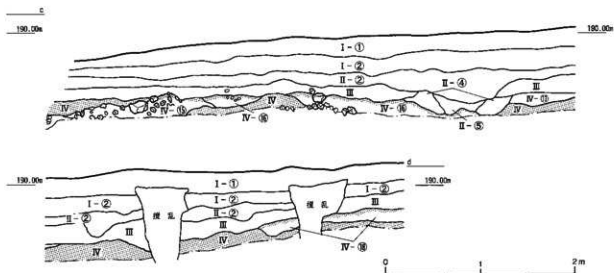


K17 +
195.20m
195.00m
194.80m

I 層 一部に砂質粘土、砂土、粘土で人形が遺棄されている
 II 層 黒色土、砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 III 層 黒色土、砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV 層 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-① 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-② 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-③ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-④ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-⑤ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-⑥ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土

IV-① 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-② 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-③ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-④ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-⑤ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土
 IV-⑥ 砂質粘土、砂土、粘土、黒色土、砂質粘土、砂土

図IV-3 K~N17ラインの土層断面



図IV-4 K13・14ラインの土層断面

3. 包含層出土の遺物 (図IV-5～7、図版4、表IV-1・2)

土器が13点、石器等が446点、合計459点出土した。層別の内訳は遺物分布図傍らに示してある。出土状況は散発的ではあるが、13ラインより南～東側のⅡ層・Ⅲ層が残る部分にややまとまっている。

(1) 土器 (図IV-5-1～11)

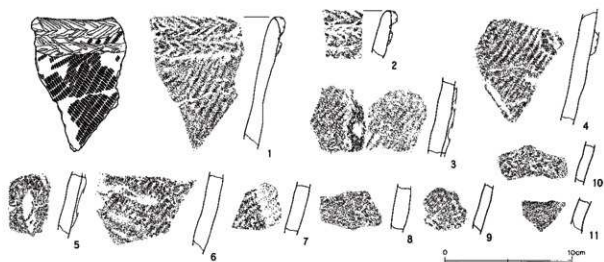
土器はK14 a・b区とL13 d区のいずれもⅡ層中から出土した。1～8は同一個体の破片で、Ⅲ群a類、縄文中期中葉の苎ヶ岡2式に相当するものである。器厚は11mm内外と比較的厚手で内面はいずれも磨かれている。胎土に砂粒、細礫が多い。0段多条のLR原体による斜行縄文を施し、口縁に沿って2条扁平な粘土紐を貼付している。口唇上から貼付帯にかけては半截竹管状施文具により、2本単位の沈線で上下逆向きの矢羽状文様が刻まれている(1、2)。3と5は、一部剥落しているが口縁の突起部下に相当する部分とみられ、2条並列あるいは鎖状に垂下する細い貼付帯がある。4も同様でこれらの貼付帯上にも刻みが見える。4の内面には黒色炭化物が付着する。1～5は黒褐色を呈する。6～8は胴部片。6、8は赤褐色を呈する。

9～11は胴部破片。9はRL原体による斜行縄文が施されている。10・11は表面が摩滅している。いずれも先の土器に較べやや薄手であるが、出土状況、胎土、焼成の共通性からⅢ群土器の可能性が高い。

(2) 石器等 (図IV-6-1～10)

石器の内訳は石鏃2点、石錐1点、石核3点、Rフレイク24点、Uフレイク3点、フレイク412点、礫1点である。重機により表土を除去した際の土を調査区傍に集積しており、石器等の総数にはここから回収できた160点を含んでいる。いずれも黒曜石製で、肉眼観察ではすべて赤井川産である。これらは縄文時代のもつと判断される。Rフレイクは最大長が3～5cm前後のものが多く、剥片の一部に連続した簡単な加工を施すもの、不規則な粗い剥離を施すものがある。フレイクは微細のものが目立つ。フレイクの総重量は296.2g。以下に掲載した石器について記すこととする。

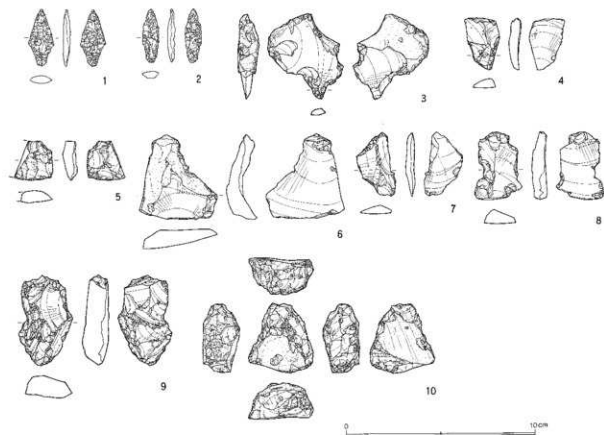
1は有茎の石鏃。2は明瞭な茎の見られないもので、基部が丸みを帯びる。裏面に原石面を残す。3は石錐。剥片の一端に片面だけの調整で簡単な機能部を作出したものである。4～9はRフレイク。4～7は先端や側縁部に若干の連続した加工を施すものである。8は縦長剥片の一侧縁に一方から湾入した調整を施している。9は粗い剥離が施されている。10は小型の角礫素材の石核。(遠藤)



図IV-5 包含層出土の土器

表IV-1 包含層出土掲載土器一覧

図番号	遺物番号	層位	分類	点数	図版番号	図番号	遺物番号	層位	分類	点数	図版番号
IV-5-1	K14b.1	II	Ⅲa	2	4-1	IV-5-7	L13d.3	II	Ⅲa	1	4-1
IV-5-2	K14b.1	II	Ⅲa	1	4-1	IV-5-8	L13d.3	II	Ⅲa	1	4-1
IV-5-3	K14b.1	II	Ⅲa	2	4-1	IV-5-9	K14a.4	II	Ⅲ	1	4-1
IV-5-4	K14b.2	II	Ⅲa	1	4-1	IV-5-10	L13d.3	II	Ⅲ	1	4-1
IV-5-5	K14a.1	II	Ⅲa	1	4-1	IV-5-11	L13d.2	II	Ⅲ	1	4-1
IV-5-6	K14b.2	II	Ⅲa	1	4-1						

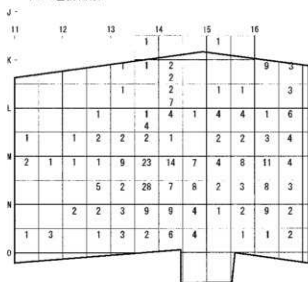


図IV-6 包含層出土の石器等

表IV-2 包含層出土掲載石器等一覧

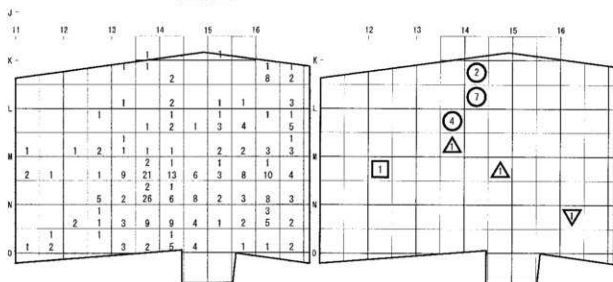
図番号	器種名	発掘区	番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号
IV-6-1	石 鏃	L13c	1	II	2.98×1.31×3.70	1.2	黒曜石	4-2
IV-6-2	石 鏃	M14d	1	II	2.82×8.80×3.50	0.8	黒曜石	4-2
IV-6-3	石 鏃	M12a	1	I	4.50×3.82×1.06	14.6	黒曜石	4-2
IV-6-4	Rフレイク	M14a	2	I	2.73×1.71×5.60	2.4	黒曜石	4-2
IV-6-5	Rフレイク	K16a	1	II	2.02×1.71×5.90	2.7	黒曜石	4-2
IV-6-6	Rフレイク	L15a	1	II	4.45×3.93×0.75	11.7	黒曜石	4-2
IV-6-7	Rフレイク	K16d	1	III	3.40×1.72×0.40	2.3	黒曜石	4-2
IV-6-8	Rフレイク	M14b	2	I	3.58×2.40×0.73	5.8	黒曜石	4-2
IV-6-9	Rフレイク	M16a	1	I	4.76×2.40×1.05	16.8	黒曜石	4-2
IV-6-10	石 核	N16a	6	I	3.44×3.25×1.70	23.8	黒曜石	4-2

出土遺物総数



上段 石器等
下段 土器

石器等総数 446点(1層:191点, II層:49点, III層:47点, 表採:160点)
土器総数 13点(II層:13点)



上段 U・Rフレイク
下段 フレイク

U・Rフレイク 27点(1層:15点, II層:6点, III層:5点, 表採:1点)
フレイク 412点(1層:174点, II層:39点, III層:42点, 表採:157点)

凡例
△ 石鏃 2点
□ 石鏃 1点
▽ 石核 3点 (表採 2点)
○ 土器 13点

※数値名称C (9年分)

図IV-7 包含層出土遺物の分布

V 日の出2遺跡の調査

1 発掘調査の方法

北海道教育委員会の事前調査において日の出2遺跡は広範囲に渡って黒曜石の剥片や破片が確認されていた。この結果から10,000㎡が調査対象面積に設定された。今回の調査では、主体部となる発掘調査範囲は1,400㎡である。これをA地区と呼称した。この他に調査対象面積10,000㎡のうち10%程度を調査し、遺跡の内容を確認する調査も行なった。そこで調査範囲1,000㎡を以下のように設定した。

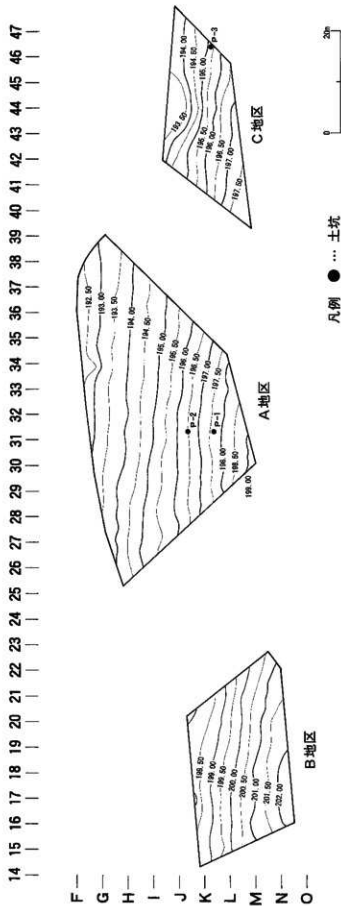
試掘調査のデータによれば、日の出地区は耕作等によって包含層が削平され消失した範囲も多く一部で遺物包含層が残存するとの事であった。この試掘のデータと現地調査の結果をもとに、主体部となるA地区の北側を流れる板小屋川に近い傾斜地のうち、A地区から約20mの距離を隔てた範囲を調査区の一つに設定した。この調査範囲は600㎡でB地区と呼称した。B地区を設定した理由は板小屋川に近い沢筋であること、表面調査において遺物が散見できたこと、更に包含層の残存状態が一部良好であったためである。また、A地区の南西側を縦断する道々余市赤井川線を挟んだ傾斜地は地形的にA地区と連続し、遺物がA地区以上に散見できる事等から調査範囲に設定した。調査面積は400㎡でC地区とした。A・B・Cの各地区設定後、発掘調査に先行して板小屋沢遺跡の進入路の造成工事と各地区の伐木、抜根作業を行い、その後、重機による表土剥ぎを開始した。造成工事や表土除去には1週間を要し、6月末に終了した。

I章で前述したとおり、小樽土木現業所から板小屋沢遺跡の一部(約200㎡)と、日の出2遺跡A地区の林道に接するHラインより東側部分(約300㎡)については、8月から工事用道路として使用するため7月中に調査終了の要請を受けていた。このため、調査員1名ずつが両遺跡の調査に着手した。A地区は板小屋川右岸の標高約198m～201mの山地斜面にあり、林道はこれに沿うように南北に延びる。試掘のデータによれば、林道脇の約300㎡に包含層の一部が残存していることが報告されていた。調査の結果、林道脇は傾斜地の下部にあるため層厚が約40～50cmある事がわかり、崖堆積物と考えられる安山岩質の垂角礫も多く包含されていた。これらの中には巨礫や巨岩も含んでいた。また、黒曜石の剥片や破片を含む包含層がⅠ層にはぼ限られていることや縄文時代中期の土器片を少量含んでいる暗赤褐色土(Ⅱ層)も確認した。急務であった約300㎡については7月下旬に調査を終了し、委託者に引き渡しを行なった。

A地区の残る約1,100㎡については遺構や遺物の濃淡を把握するために5m四方の発掘区の一つ置きに調査する方法を用いた。この結果をもとに全体の調査に着手した。また、これと併行して土層の堆積状況等を把握するためのトレンチ調査も行なった。トレンチ調査の結果、Ⅱ層はGからHラインにかけて顕著に認められ、Jラインから西側の斜面上側はⅠ層とⅢ層で構成されていた。調査区西端の土層断面ではⅠ層とⅢ層の境界部分がほぼ水平に削平された部分も見られた。トレンチから出土した遺物はすべてⅠ層からの出土である。

A地区の調査と併行して、8月の下旬より、B地区の調査に着手した。B地区は確認調査区であるために6月の表土剥ぎの段階で、重機を用いてⅢ層の上面まで掘削を行なった。C地区も同様である。また、掘削の際Ⅰ層に含まれる遺物については可能な限り採取に努めた。

C地区は急勾配な傾斜地で、崖堆積物と考えられる巨礫が含まれており、表土剥ぎの際に重機を用いて除去した。また、この地区は唐松が多く植林されていた事から重機による掘削が困難であった。結果的に人力による調査が多くなり、黒曜石製の剥片や破片を多量に採取する事ができた。(笠原)



図V-1 最終面の地形と遺構位置図

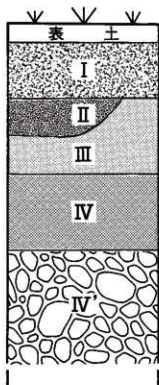
2 基本土層

日の出2遺跡の基本土層模式図を図V-2に示した。遺跡は赤井川カルデラの北側、元服山げんぷくやまより西に突出した台地の土縁部において、板小屋川上流域右岸段丘斜面の標高約197~201mに位置している。山麓緩斜面にあるために浸食や再堆積を繰り返し土壌形成に影響を及ぼしていると考えられる。昭和23年以降は農地造成や、植林等によって人為的な変化が加えられたために包含層が消失した範囲も多い。A・B・Cの各地区は高低差が約4mあり、最も傾斜のあるC地区の傾斜角は約30°である。このため、土壌中には崖堆積物である安山岩の亜角礫を多く含んでいた。特にA地区とC地区の斜面下部のローム層中には安山岩の巨礫や巨岩が点在していた(図V-4)。

各地区共、主にI層とIII層で構成され、斜面下部の一部でII層を確認できる。また、A地区西端の標高199m附近の土層断面には、I層とIII層の境界部分がほぼ水平に削平された部分もあり、耕作痕もみられた。遺物包含層はI層とII層で、出土遺物の9割以上を占める黒曜石の剥片や破片等はほぼI層からの出土である。また、II層中からは縄文時代早期と中期に属する土器片も出土している。出土遺物の分布は斜面の傾斜方向にほぼ一致する。

土層の記載は『土壌調査ハンドブック改訂版』(日本ペトロロジー学会編2000)を参考にし、土色、土性、堅密度、粘着性、含有物等について記載した。土色については『新版標準土色帖』(小山・竹原1997)を用いた。

(笠原)



図V-2 基本土層模式図

I層：明褐色土(7.5YR7/2)。層厚10~30cm。縄文時代の遺物を包含する。傾斜地における自然の営力や人為的な変化も受けている層。乾燥状態では灰白色を呈し、クラックを生じる。

II層：暗赤褐色土(5YR3/3)。層厚10~20cm。縄文時代早期・中期の遺物を包含する。標高約194~195mより下位の斜面に堆積する。

III層：ぶい赤褐色ローム質土(5YR4/4)。層厚20~40cm。強く締まり粘性は弱い。今回の調査では遺物は出土していない。

IV層：暗褐色ローム質土(7.5YR3/3)。層厚20~40cm。強く締まり粘性は弱く礫を含まない。

IV'層：赤褐色ローム質土(2.5YR4/8)。層厚40cm以上。強く締まり粘性は弱い。小礫(G:1~5cm)から巨礫(B:20~30cm)まですこぶる富む。A地区のHラインより斜面下部とC地区では巨岩(LB:≥30cm)も見られた。いずれも安山岩の亜角礫。

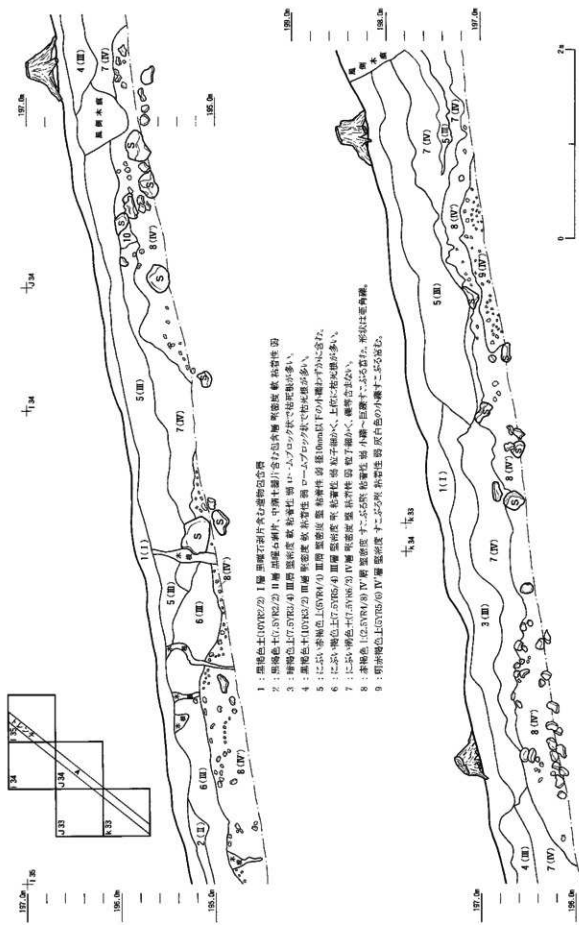
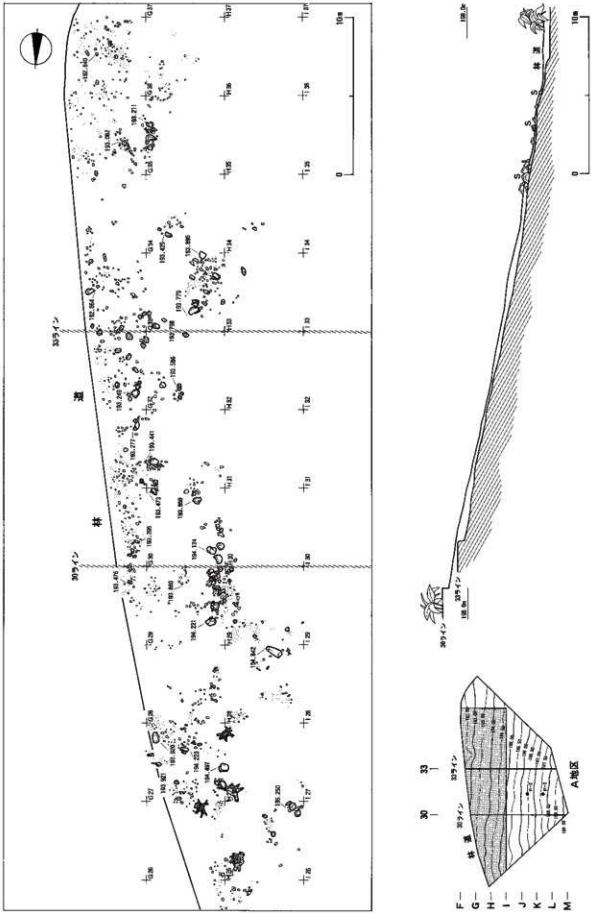


図 V-3 I 35~K 33土層断面



図V-4 A地区斜面下部の礫の様相と地形図 (IV'層上位)

3 遺構と遺構出土の遺物

概要

遺構はA地区から土坑2基(P-1・2)、C地区から土坑1基(P-3)を検出した。A地区の2基は標高約197mで検出したもので、いずれも浅く小型で、遺物はない。C地区のP-3は調査区南端の標高約195m、I層下位で検出した。底部は溝状に構築されており、Tピットの可能性もある。

(1) 土坑

P-1 (図V-5、図版8-1・2、表V-1)

位置：K31 a・b 規模：0.90×0.64/0.72×0.35/0.22m

確認・調査：I層調査後のIII層上面で楕円形の灰褐色土の落ち込みを確認した。覆土の堆積状況や坑底の形状等から土坑と判断して調査した。土層断面で見える覆土の2・3層はブロック状である。

遺物は出土していない。

時期：周辺の出土遺物等から推定すると縄文時代早期～中期頃が考えられる。(笠原)

P-2 (図V-5、図版8-3・4、表V-1)

位置：J31 a・b 規模：0.63×0.40/0.53×0.33/0.20m

確認・調査：I層調査後のIII層上面で不整形の灰褐色土の落ち込みを確認した。覆土の堆積状況や坑底の形状等から土坑と判断して調査した。土層断面で見える覆土の1・2層はブロック状である。

遺物は出土していない。

時期：周辺の出土遺物等から推定すると縄文時代早期～中期頃が考えられる。(笠原)

P-3 (図V-5、図版11-1・2、表V-1・2)

位置：K46 a・b 規模：1.14×0.38/0.92×0.10/1.15m

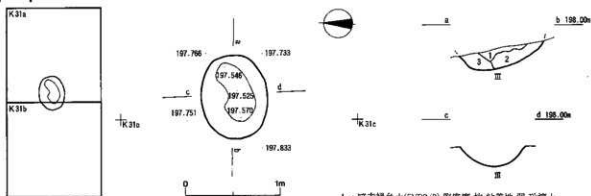
確認・調査：I層下位を精査中に、楕円形の落ち込みを確認した。形態や規模から土坑と判断できた。開口部は楕円形でそのまま約90cm掘り込んだところで短軸と並行するように更に溝状の落ち込みが構築されている。覆土の堆積状況を把握するために土層断面を観察した。その結果、覆土は自然堆積であると考えられる。坑底部には粘性の弱い黒褐色土が堆積し、底部ほど黒色化している。

これは開口部から枯葉や雨水、昆虫類等の流入によって土壌化が進んだものと思われる。また、覆土の堅密度は概ね軟性のものが多く、斜面上部からの流れこみによる結果と思われる。III層とIV層を掘り込んで構築されているために壁面は固くしまり、崩落を繰り返したような痕跡が覆土中にあまり認められない。また、坑底部の形態は溝状でTピットの底部を思わせるものである。

遺物：覆土中から剥片が4点、Rフレイクが1点出土した。すべて黒曜石製である。1はRフレイクで欠損している。腹面には素材剥離面を残し、外湾する左側縁部に二次加工が施されている。側縁部には摩滅痕が観察される。スクレイパーの欠損品と思われるがここではRフレイクとして扱った。

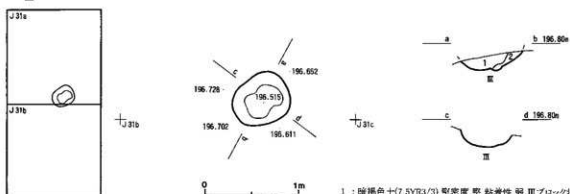
時期：検出面等から判断すると縄文時代以降の可能性が高い。(笠原)

P-1



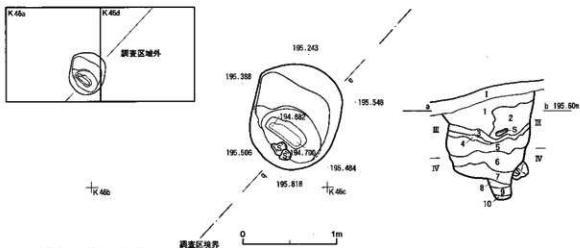
- 1 : 暗赤褐色土(5YR3/3) 低密度 軟 粘着性 弱 砂礫土.
- 2 : 暗褐色土(7.5YR3/3) 低密度 堅 粘着性 弱 IIIブロック状 壤土.
- 3 : 黒褐色土(7.5YR3/2) 低密度 軟 粘着性 弱 IIIブロック状 壤土.

P-2

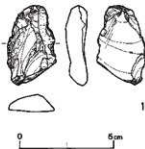


- 1 : 暗褐色土(7.5YR3/3) 低密度 堅 粘着性 弱 IIIブロック状 壤土.
- 2 : 褐色土(7.5YR4/3) 低密度 堅 粘着性 弱 IIIブロック状 壤土.

P-3



- 1 : にぶい褐色土(5YR6/4) 低密度 堅 粘着性 弱 IIIブロック状 壤土.
- 2 : にぶい褐色土(7.5YR6/3) 低密度 軟 粘着性 弱 IIIブロック状で付死機多い 壤土.
- 3 : にぶい褐色土(7.5YR7/3) 低密度 堅 粘着性 弱 層位Iに近いがやや灰白色化する 砂礫土.
- 4 : 灰褐色土(7.5YR5/2) 低密度 軟 粘着性 弱 砂礫土.
- 5 : にぶい赤褐色土(5YR5/4) 低密度 堅 粘着性 弱 粒が粗い 壤土.
- 6 : 灰褐色土(5YR4/2) 低密度 軟 粘着性 弱 壤土.
- 7 : にぶい赤褐色土(5YR4/3) 低密度 軟 粘着性 弱 壤土.
- 8 : にぶい褐色土(7.5YR4/4) 低密度 軟 粘着性 弱 粒子細かい 壤土.
- 9 : 灰褐色土(7.5YR4/2) 低密度 軟 粘着性 弱 層位IIに近いがやや粗い 壤土.
- 10 : 黒褐色土(7.5YR3/1) 低密度 軟 粘着性 弱 壤土.



図V-5 P-1・2・3と出土遺物

4 包含層出土の遺物

概要 包含層出土の遺物は土器片が76点、石器等が33,512点、総計33,588点である。

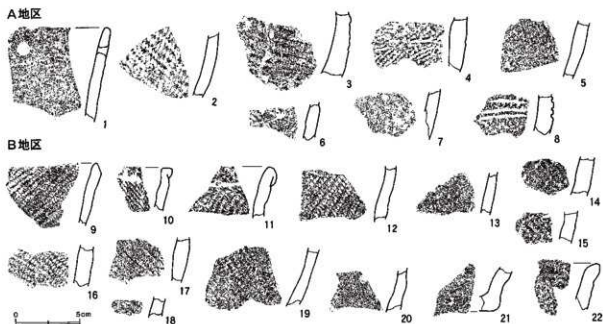
土器は縄文時代早期と中期、後期と考えられるものがある。風化等により表面が摩滅し分類の困難なものが多いが、分類不明とした中には胎土、焼成等から中期(Ⅲ群)とみなされる資料がある。また、早期(Ⅰ群a類)の土器片(図V-6-1)と同一発掘区(G31区)、および近接したH31区から出土した破片(21点)は、出土層位、器厚、胎土から同一時期の可能性が高いものである。

石器等は黒曜石製の剥片や砕片が33,266点で全体の99%を占めている。頁岩製のスクレイパーが2点出土した他はすべて黒曜石製である。今回出土したものに定形的な石器は少なく、不定形な剥片に軽微な二次加工を施す程度のもが目立った。未成品や破損品も少量見られる。また簡単な打ち欠きだけの石核類も多い。礫石器の出土が少ない事も特徴の一つである。たたき石は表面が摩滅しているために使用痕が不明瞭であったが、形態等からたたき石として扱った。出土遺物の総数、土器の分類別および主な石器の器種別の出土分布については図V-7・8、13~16に示した。

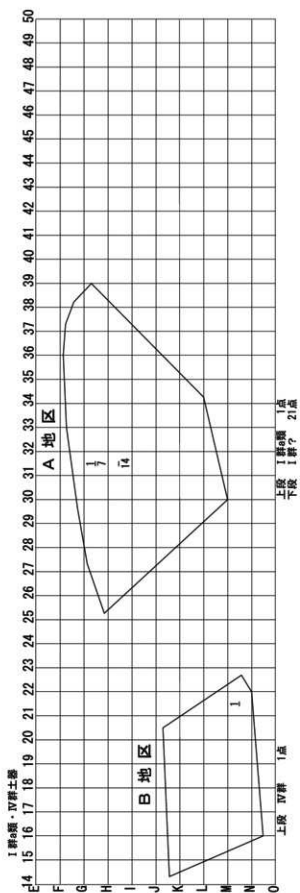
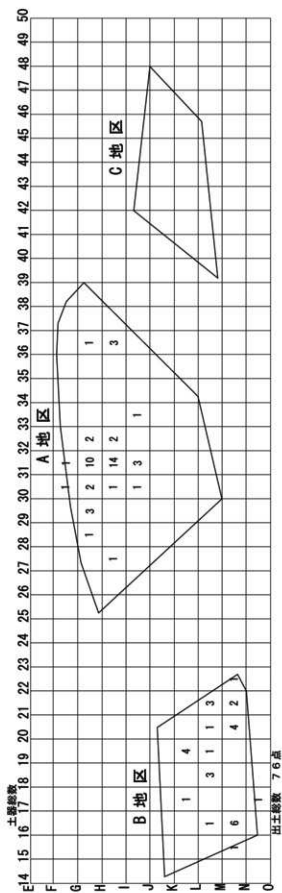
(1) 土器(図V-6-1~22、図版13-1)

1~8はA地区、9~22はB地区出土のもの。1はやや摩滅しているが無文である。胎土に細礫が目立ち、薄手で焼成は良く内面は平滑に調整されている。口唇断面等の特徴からⅠ群a類、貝殻文・条痕文系土器としておく。2~8はⅢ群土器。2~5はやや厚手である。3はRL、4~6はLR原体による斜行縄文が施されている。4の原体は0段多条である。7は無文であるが胎土の共通性からⅢ群と判断した。8は半截竹管状施文具の腹面での並列する沈線文がある。

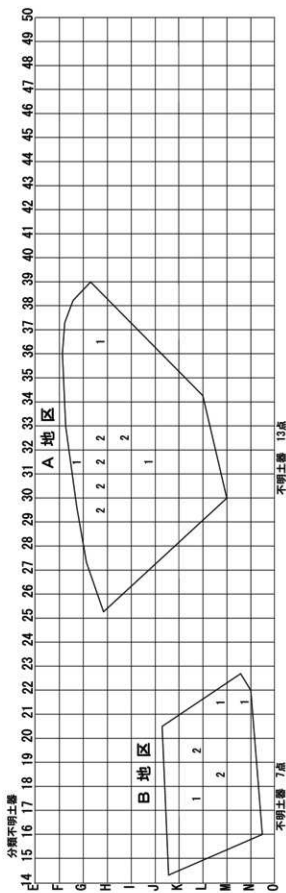
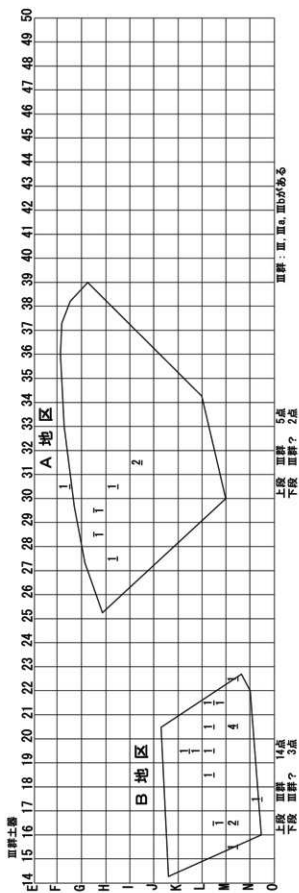
9~21はⅢ群土器である。9は口唇断面が尖り気味で0段多条のLR原体による斜行縄文が施されている。10、11は口縁部を折り返して厚みをもたせている。12~14はLR、15~19はRL原体による斜行縄文のある胴部片。19は底部に近い部分である。20は無文のもの。21は唯一認められた底部片で、底面附近でややくびれている。22は切り出し形の口唇断面、Ⅲ群土器片との胎土の違いから後期、Ⅳ群b類土器の可能性が高いものである。2~21は円筒上層式の後半期からそれ以降の時期に併行する土器である。このうち8はⅢ群b類の天神山式、9は見晴町式に相当しそうである。



図V-6 包含層出土の土器



図V-7 土器の分布(1)



図V-8 土器の分布(2)

(2) 石器等

包含層出土の石器等の総数は33,512点である。このうちI層出土の黒曜石の剥片や砕片が30,142点で、全体の90%を占めている。地区ごとの内訳はA地区が5,039点、B地区15,253点、C地区9,850点である。剥片石器の石材については、赤井川村が黒曜石の産地である事から、原産地分析は行っていない。赤井川産の黒曜石には、流紋岩の白い球顆や燐灰石の結晶等が入り交じってほぼ並行に配列する流理構造を有する点に特徴がある。しかし今回の調査では、球顆が比較的に少ない漆黒の良質な石材も剥片石器の素材として選択されていた。器種別の内訳は石鏃が9点、石槍・ナイフ4点、石錐4点、スクレイパー12点、Rフレイク80点、Uフレイク23点、石核55点、原石13点、たたき石5点、台石片1点である。頁岩製のスクレイパーが2点出土(図V-16・17)したほかはすべて黒曜石製である。スクレイパーは、素材の形状にかかわらず側縁部に調整剥離が連続して加えられたものをスクレイパーとして扱い、Rフレイクとは区別した。なお、掲載石器の中で、赤井川産の特徴を示す球顆の多いものについてはことわりを記載している。また、頁岩製スクレイパーについてはVI章の小括でも別記したので参照されたい。

石鏃(図V-9-1~8、図版13-3、表V-4)

8点図示した。4を除き、流紋岩の球顆の少ない剥片を素材に選択している。1は体部下半が欠損しているために、形態は不明であるが、両面共に全体の調整が入念に施されている。2~8は有茎の石鏃である。特に2・3・5はかえしが明瞭なもので、2は側縁の刃部がやや内湾する。5の作りも丁寧で側縁部は直線状に作出され全体の形状が三角形を呈する。4は流紋岩の球顆を含む剥片を素材にしており、左右のかえしの形状が異なる。6・7は他と比較するとやや小型である。7は腹面に素材面を残し、二次調整は周縁部に施される。8も腹面に素材面を残し成形がやや粗雑でかえし部が不明瞭である。

石槍またはナイフ(図V-9-9・10、図版14-1、表V-4)

2点図示した。9は流紋岩の球顆を多く含む剥片を素材にしている。器体中央部にかえしが作出され、茎部の調整が左右対象になっていない。10は茎部が不明瞭なもので先端部が欠損する。最厚部が右側に偏っている。

石錐(図V-9-11~15、図版14-1、表V-4)

5点図示した。いずれも球顆の少ない剥片を素材にし、形態を大きく変えることなく機能部を作出しているものである。11は外湾する薄型の剥片を素材にして、周縁部に二次加工を施している。石槍またはナイフ等の可能性も考えられる。12~14は剥片素材の一端を刺突部として利用し作出したもので礫皮面を残している。15は転礫の剥片を素材にしたもので、赤井川産の特徴が観察できる。厚い剥片をそのまま素材にしますので、腹面は礫皮面が全体を覆っている。下端部から右側縁にかけてノッチ状に二次加工が施され刺突部が作られている。スクレイパーである事も考えられる。

スクレイパー(図V-9-16~27、図版14-1、表V-4)

12点図示した。18を除きいずれも球顆の少ない剥片を素材にしている。16・17は頁岩製でC地区のJ42dグリッドのI層から出土した。16は縦長剥片を素材にして、腹面には素材剥離面を残す。背面側の周縁部に二次加工が施されている。17は幅広く横長の尖頭器の調整剥片と考えられる。上端部には背面側からの器面調整が施されている。末端側の縁辺には微細な加工痕が見られる。この2点に関してはVI章の小括でも別記した。18・19はエンドスクレイパーの未製品と考えられる。18は厚手の剥片を素材にし、腹面には素材剥離面を残す。背面末端部の調整も粗いままである。19は上端部に礫打

面を残す。背腹両面共、素材面は残さず二次加工が施されているが、粗雑な調整である。20・21はエンドスクレイパーで上端部が細く下端部にかけて幅広である。20は剥片素材の形態を大きく変えることなく作られているもの。右側縁の折断面には調整が加えられ、先端部は緩い角度からの加工が施されている。21は流紋岩の球顆を多く含む剥片を素材にしている。背面全体に丁寧な調整が施され、周縁からの加工も連続的に先端部は急角度に仕上げられている。22～27は円形または楕円形に成形されたものでスクレイパーとして扱った。いずれもやや粗い調整ではあるが、形態等がほぼ統一である事に特徴がある。22の上端には礫打面を残し、バルブを取り除くための剥離が施されている。背面には礫皮面、腹面には素材剥離面が残る。23は周縁部からの調整によって成形されるもの。24は、右側縁に鋸歯状の剥離が見られるが、左側縁は折断面が残ったままで全体の成形は粗い。25はやや厚手の剥片を素材にし、背面上端には礫皮面が残る。両面から厚みを除くための剥離が加えられる。周縁の調整はやや粗く刃縁部は摩滅する。下端部には石が生成していく過程で生じたと考えられる空洞がある。26は薄手の剥片素材の周縁部に粗い加工が施される。27は背面に礫皮面、上端左側には折断面が残る。外湾する刃部の調整はやや急角度に仕上げられ、摩滅痕が観察できる。

R フレイク (図V-10-28～37、図版14・15-1、表V-4)

10点図示した。28は厚い転礫の剥片を素材にし、腹面には素材剥離面が残る。周縁部に顕著な二次加工はなく、先端部の左側縁にわずかに剥離痕が観察できる。29～31は赤井川産の特徴である球顆の多い剥片を素材にしている。29はほぼ両面加工であるが上端部に礫皮面が残る。石槍の欠損品である事が考えられる。30は腹面に素材剥離面が残り、31は両面加工である。スクレイパーの欠損品が考えられる。32～35は尖頭状の端部をもつもので石鏃や石錐等の未製品が考えられる。33・34は球顆の多い剥片を素材にしている。34は左側縁にかえし状の剥離が施され、右側縁には折断面がそのまま残る。35はやや粗い両面加工で先端部の右側縁には折断面が残る。36は縦長剥片で片面加工、端部が欠損する。37は礫皮面が残る厚手の剥片の一端に微細な剥離が見られる。

石核 (図V-10・11-38～52、図版15-1、表V-4)

15点図示した。赤井川産の特徴が顕著に見られるものは42・46・52がある。また、40・50は漆黒で球顆等が見られない。40・43は転礫を素材にし、他はすべて角礫素材である。いずれも粗い加工のものが多く礫皮面が残る。39・42は交互剥離が見られるもの。41は小口面からの剥離が施されている。

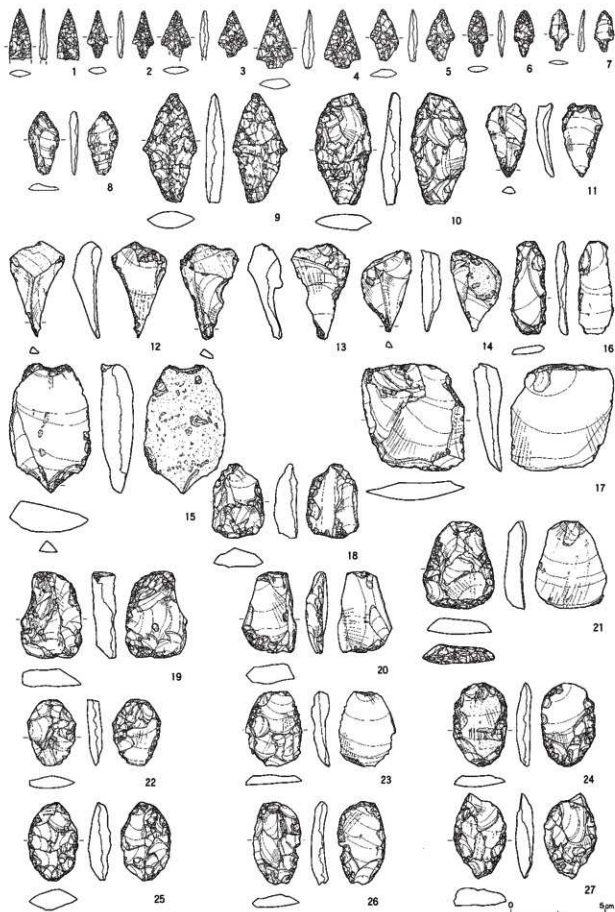
たたき石 (図V-11・12-53～57、図版16-1、表V-4)

5点図示した。すべて安山岩製である。いずれも顕著な使用痕は見られないが、形態等からたたき石として扱った。53～55は平坦面と側縁部にわずかに敲打痕様の剥離が観察できる。56は棒状礫を素材にしているもので、両端部は欠損する。57は扁平な礫を素材にし、側縁部に摩滅が見られる。敲打によるものかは判然としない。上端を欠損する。

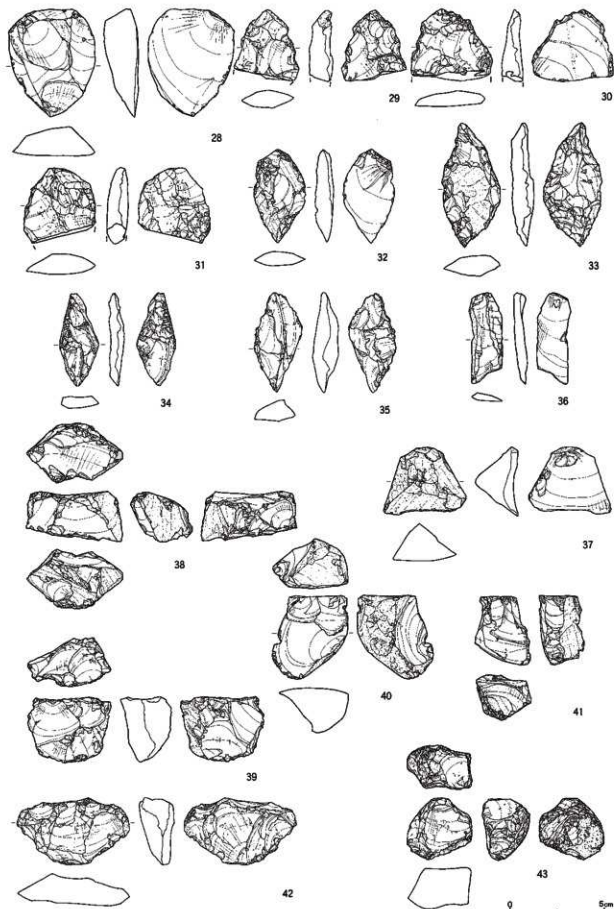
台石 (図V-12-58、図版16-1、表V-4)

1点図示した。安山岩製でI層から出土した。平坦面の中央部に僅かに擦痕が観察できるため、台石とした。IV'層の礫層中には同様の垂角礫を多く包含するため、自然礫の可能性もある。

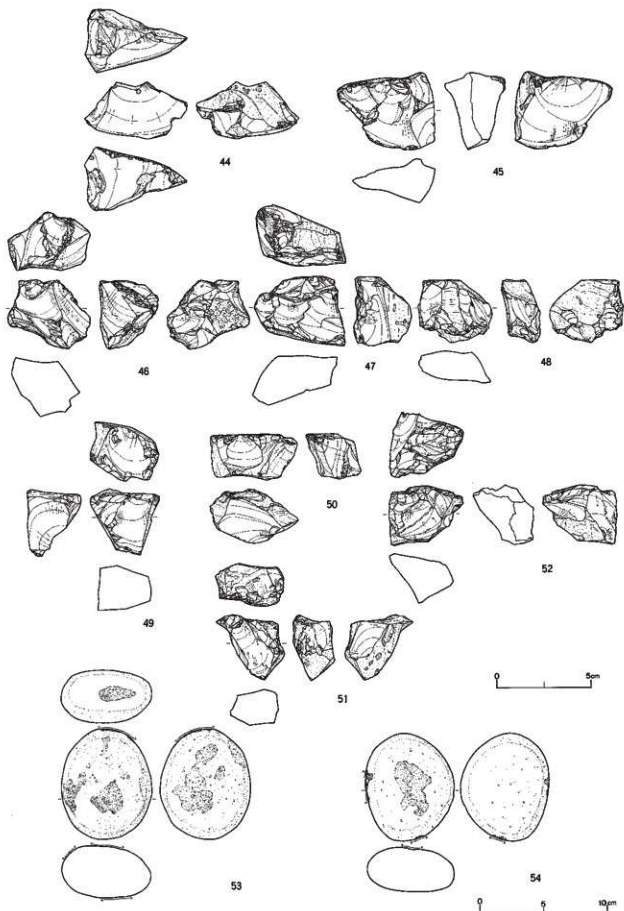
(笠原)



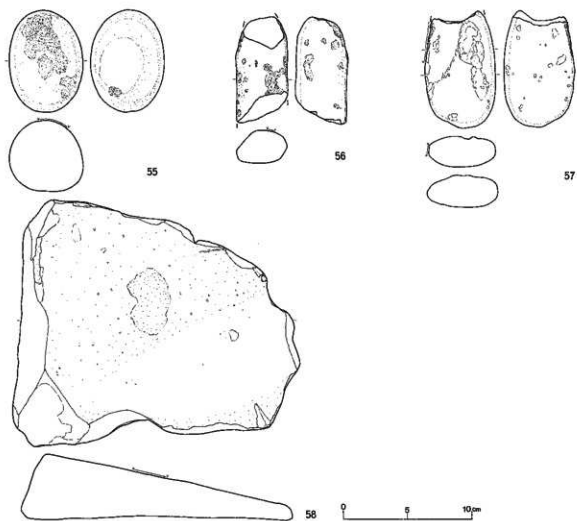
図V-9 包含層出土の石器(1)



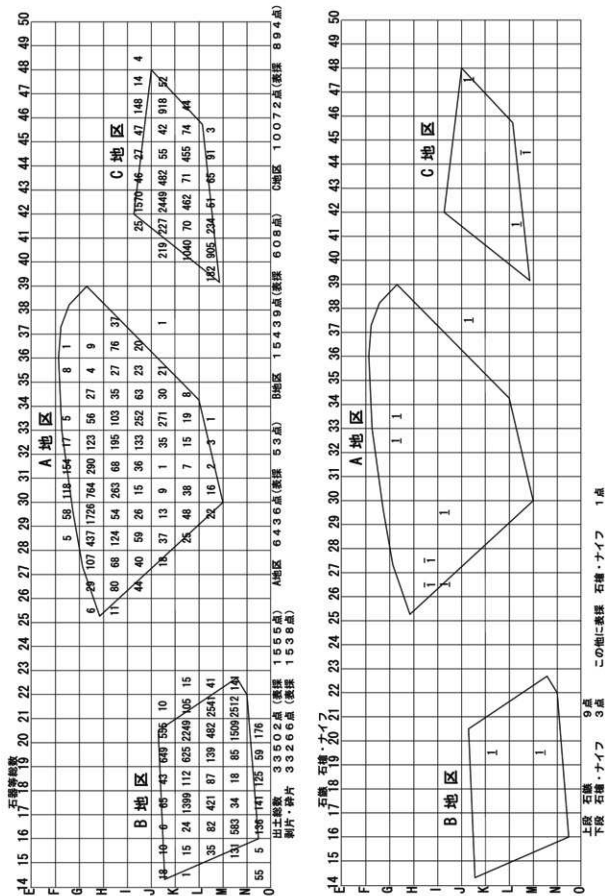
図V-10 包含層出土の石器(2)



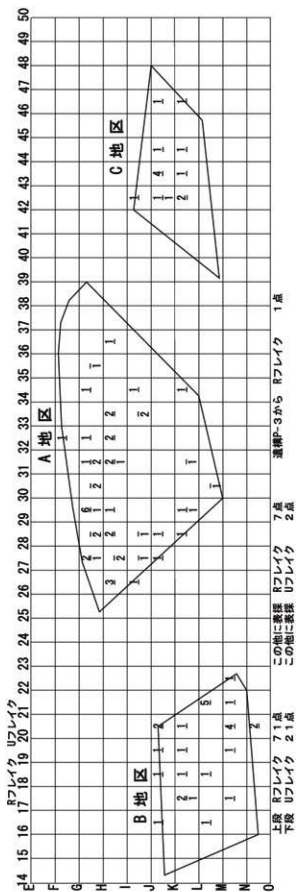
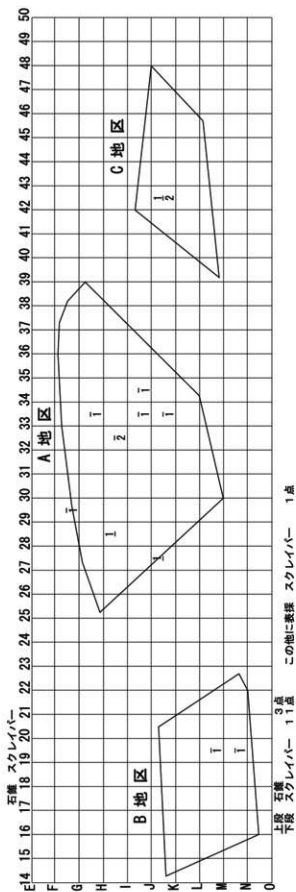
図V-11 包含層出土の石器(3)



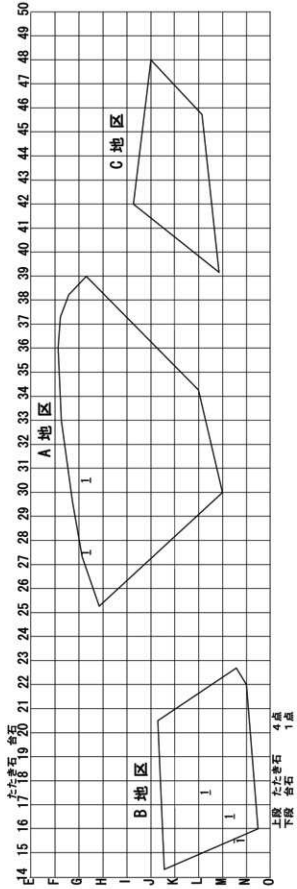
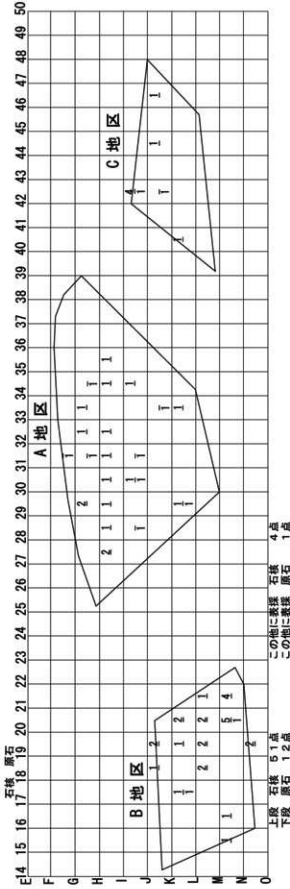
図V-12 包含層出土の石器(4)



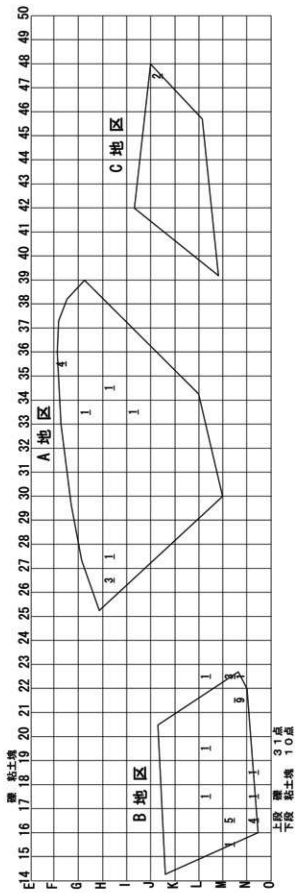
図V-13 石器の分布(1)



図V-14 石器の分布(2)



図V-15 石器の分布(3)



図V-16 石器の分布(4)

表V-1 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模(m)	時期
P-1	土坑	K31a・b	Ⅲ層上位	0.90×0.64/0.72×0.35/0.22	縄文時代
P-2	土坑	J31a・b	Ⅲ層上位	0.63×0.40/0.53×0.33/0.20	縄文時代
P-3	土坑	K46a・b	I層下位	1.14×0.38/0.92×0.10/1.15	縄文時代以降

表V-2 遺構出土掲載石器一覧

図番号	遺構名	器種名	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	地区
V-5-1	P-3	Rフレイク	覆土中	4.20×2.43×1.00	11.1	黒曜石	13-2	C

表V-3 包含層出土掲載石器一覧

図番号	遺物番号	層位	分類	点数	図版番号	地区	図番号	遺物番号	層位	分類	点数	図版番号	地区
V-6-1	G31d.4	Ⅱ	I a	1	13-1	A	V-6-12	L19d.6	I	Ⅲ a	1	13-1	B
V-6-2	H30d.2	I	Ⅲ	1	13-1	A	V-6-13	M20c.9	I	Ⅲ	1	13-1	B
V-6-3	I31a.3	I	Ⅲ	1	13-1	A	V-6-14	M15d.3	I	Ⅲ	1	13-1	B
V-6-4	H27.1	I	Ⅲ	1	13-1	A	V-6-15	L18a.4	I	Ⅲ	1	13-1	B
V-6-5	G31b.1	Ⅱ	Ⅲ	1	13-1	A	V-6-16	M20b.5	I	Ⅲ a	1	13-1	B
V-6-6	F30b.1	I	Ⅲ	1	13-1	A	V-6-17	M16d.4	I	Ⅲ	1	13-1	B
V-6-7	G29b.4	Ⅱ	Ⅲ	1	13-1	A	V-6-18	K19b.7	I	Ⅲ	1	13-1	B
V-6-8	I31a.3	I	Ⅲ b	1	13-1	A	V-6-19	M20b.5	I	Ⅲ a	1	13-1	B
V-6-9	L20a.3	I	Ⅲ a	1	13-1	B	V-6-20	L16a.1	I	Ⅲ	1	13-1	B
V-6-10	M16a.4	Ⅱ	Ⅲ	1	13-1	B	V-6-21	N17d.4	I	Ⅲ a	1	13-1	B
V-6-11	M22b.1	I	Ⅲ a	1	13-1	B	V-6-22	M21b.7	I	IV b	1	13-1	B

表V-4 包含層出土掲載石器等一覧

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	地区
V-9-1	石 鎌	K19b.1	I	(2.64)×1.14×0.33	(0.8)	黒曜石	13-3	B
V-9-2	石 鎌	G32a.1	I	2.50×1.12×0.33	0.6	黒曜石	13-3	A
V-9-3	石 鎌	J37.1	I	(2.42)×1.49×0.38	(1.0)	黒曜石	13-3	A
V-9-4	石 鎌	L41d.2	I	3.05×1.75×0.50	2.0	黒曜石	13-3	C
V-9-5	石 鎌	M19d.4	Ⅱ	2.71×1.38×0.42	1.4	黒曜石	13-3	B
V-9-6	石 鎌	J47a.2	I	2.43×1.03×0.32	0.7	黒曜石	13-3	C
V-9-7	石 鎌	I29.1	I	2.18×1.02×0.19	0.4	黒曜石	13-3	A
V-9-8	石 鎌	I26.1	I	3.34×1.55×0.34	1.6	黒曜石	13-3	A
V-9-9	石槍・ナイフ	H27a.1	I	5.75×2.82×0.85	11.4	黒曜石	14-1	A
V-9-10	石槍・ナイフ	H26a.5	Ⅲ	5.89×2.95×0.70	14.7	黒曜石	14-1	A
V-9-11	石 錐	H28a.1	Ⅱ	3.68×2.12×0.48	3.9	黒曜石	14-1	A
V-9-12	石 錐	表採.1	-	5.06×1.81×1.21	9.7	黒曜石	14-1	B
V-9-13	石 錐	J27.1	I	5.08×2.63×1.41	12.4	黒曜石	14-1	A
V-9-14	石 錐	J42c.6	I	4.30×2.50×0.87	8.0	黒曜石	14-1	C
V-9-15	石 錐	H28.1	I	6.79×4.18×1.39	46.1	黒曜石	14-1	A
V-9-16	スクレイパー	J42d.8	I	4.86×1.76×0.40	5.7	硬質頁岩	14-1	C
V-9-17	スクレイパー	J42a.1	I	5.64×5.34×0.91	33.4	頁岩	14-1	C
V-9-18	スクレイパー	G29d.4	I	3.93×2.62×1.09	11.5	黒曜石	14-1	A
V-9-19	スクレイパー	H32c.1	I	4.61×3.19×0.92	18.2	黒曜石	14-1	A
V-9-20	スクレイパー	H32d.1	I	4.27×2.86×0.93	12.8	黒曜石	14-1	A
V-9-21	スクレイパー	I33b.1	I	4.59×3.73×0.76	17.5	黒曜石	14-1	A
V-9-22	スクレイパー	L19d.3	I	3.53×2.58×0.70	6.3	黒曜石	14-1	B
V-9-23	スクレイパー	J33d.2	I	3.90×2.91×0.46	7.7	黒曜石	14-1	A
V-9-24	スクレイパー	M19d.3	Ⅱ	4.40×2.81×0.55	8.9	黒曜石	14-1	B
V-9-25	スクレイパー	F29.1	I	4.11×2.64×1.01	10.1	黒曜石	14-1	A
V-9-26	スクレイパー	I34a.1	I	4.37×2.50×0.61	8.4	黒曜石	14-1	A
V-9-27	スクレイパー	G33.3	I	4.53×2.71×0.84	10.1	黒曜石	14-1	A
V-10-28	Rフレイク	H26b.3	Ⅲ	5.68×4.49×1.78	39.7	黒曜石	14-1	A

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	地区
V-10-29	Rフレイク	J42d.5	I	3.61×2.84×0.91	11.7	黒曜石	14-1	C
V-10-30	Rフレイク	J28d.1	I	3.76×4.25×0.66	13.8	黒曜石	14-1	A
V-10-31	Rフレイク	K20d.3	I	4.00×3.74×1.08	16.4	黒曜石	14-1	B
V-10-32	Rフレイク	H26a.6	III	4.90×2.74×0.76	10.2	黒曜石	14-1	A
V-10-33	Rフレイク	M17b.2	I	6.55×3.05×1.10	17.6	黒曜石	15-1	B
V-10-34	Rフレイク	H33d.1	I	4.87×2.05×0.64	5.9	黒曜石	15-1	A
V-10-35	Rフレイク	G29c.1	I	5.23×2.44×1.22	11.4	黒曜石	15-1	A
V-10-36	Rフレイク	J44d.1	I	4.81×1.58×0.33	3.5	黒曜石	15-1	C
V-10-37	Rフレイク	表採.20	-	3.32×3.37×2.04	18.9	黒曜石	15-1	C
V-10-38	石核	H35.1	I	2.09×4.87×2.16	34.9	黒曜石	15-1	A
V-10-39	石核	G29d.2	I	3.25×4.16×2.12	30.7	黒曜石	15-1	A
V-10-40	石核	H28c.1	II	4.40×3.60×2.40	37.8	黒曜石	15-1	A
V-10-41	石核	H34d.2	I	3.70×2.63×1.84	22.7	黒曜石	15-1	A
V-10-42	石核	G32c.1	I	3.39×5.95×1.26	29.2	黒曜石	15-1	A
V-10-43	石核	M15d.1	I	3.26×3.32×1.99	25.5	黒曜石	15-1	B
V-11-44	石核	M20c.11	I	2.39×5.27×3.27	33.4	黒曜石	15-1	B
V-11-45	石核	M21c.10	I	3.90×4.56×1.52	40.1	黒曜石	15-1	B
V-11-46	石核	K20b.3	I	3.60×4.29×2.92	38.2	黒曜石	15-1	B
V-11-47	石核	J18d.1	I	3.54×4.60×2.05	52.0	黒曜石	15-1	B
V-11-48	石核	I42c.2	I	3.40×3.94×1.27	23.7	黒曜石	15-1	C
V-11-49	石核	表採.10	-	3.27×2.78×2.35	28.4	黒曜石	15-1	C
V-11-50	石核	表採.11	-	2.20×4.41×2.06	29.4	黒曜石	15-1	C
V-11-51	石核	I42a.5	I	3.04×2.51×1.81	19.8	黒曜石	15-1	C
V-11-52	石核	J46d.2	I	2.93×4.20×1.92	26.2	黒曜石	15-1	C
V-11-53	たたき石	L17a.2	I	8.65×7.18×4.16	329.6	安山岩	16-1	B
V-11-54	たたき石	M16b.5	I	8.41×6.92×3.28	244.2	安山岩	16-1	B
V-12-55	たたき石	G27.5	I	8.04×5.74×5.51	368.7	安山岩	16-1	A
V-12-56	たたき石	G30d.5	I	(7.82)×3.98×2.60	(117.4)	安山岩	16-1	A
V-12-57	たたき石	表採	-	(8.40)×5.53×2.24	(130.4)	安山岩	16-1	B
V-12-58	台石	M15a.1	I	22.80×19.50×3.40	2820.0	安山岩	16-1	B

VI章 小 括

1 日の出2遺跡出土のスクレイパーと剥片について

今回調査したA・B・Cの各地区から出土した黒曜石の剥片や破片は、ほぼI層からの出土である。I層は斜面の再堆積物や人為的な改変等を受けている事から層位的な新旧関係はつかめない。

II層は標高約194~195mより下位の斜面で確認され、縄文時代早期と中期の土器片等が出土した。I層とII層の調査終了後、III層の上面において旧石器時代の遺物の出土を想定して調査も行なった。III層は堅く締まるローム層で、III層上面で取り上げた剥片も僅かにあるがいずれも木根等の自然の営力によるものと考えられ、本来はI層のものと考えられる。しかし、I層中の剥片の中に旧石器時代のもが含まれている可能性もあることから、整理事業の際には可能な限り剥片の観察を行ない接合作業も試みた。接合されたものはA地区で19点、B地区13点、C地区4点である。これらはすべて不定形剥片の折れ、または割れによるもの同士の接合で、石器の製作工程を迫るような接合資料は得られなかった。出土した石核や剥片等の形態等から見て大半が縄文時代の所産と考えられる。

石核は角礫を素材にしたものがほとんどで、転礫素材のものは僅かである。A・B・Cの各地区を通じ石核素材の選択性に違いは見られない。今回の調査では黒曜石の剥片や破片が出土遺物の99%を占める中で、僅か2点だけ頁岩製の剥片石器がC地区から出土した。出土地点は2点ともJ42dグリッドのI層中で、この地点は唐松の根による攪乱を受けていた。2点ともスクレイパーで出土地点と素材から見て旧石器時代のものである可能性が考えられる(図V-9-16・17、図版14-1)。

16は、硬質頁岩を素材にし、縦長剥片の縁辺部に連続する二次加工が施されたスクレイパーである。17は、横長剥片の末端辺に連続する微細な剥離があり、背面方向からは器面調整も施されている。形態等から見て、やや大型の尖頭器の調整剥片が考えられる。ここでは、スクレイパーとして扱った。

昭和30年代のはじめに松下亘らにより日の出A地点の表面踏査が行なわれた(松下1958)。日の出A地点は冷水峠の南西カルデラ内の標高約220mにあり、報告されている位置図がおおまかであるために特定は困難であるが、C地区から50~100m西側の山腹丘陵地にあると思われる。この丘陵地の背後には標高724mの大黒山が控えている。C地区西側のこの付近には地形の変化点ともいえる比較的平坦な場所があってA地点に近いと考えられる。松下の報告によれば「縄文文化の遺物は少なく(中略)明白に無土器文化の石器と断定できるものは十数点採集されている」。さらに「本遺跡の石器は黒曜石のものが少なく硬質頁岩、チャートが多い」と記述されている。全例表面採取によるもので石刃核(硬質頁岩製1点・チャート製1点)、石刃(硬質頁岩製3点)、舟底形石器(チャート製1点)が報告されている。このうち舟底形石器とされているものは形態と大きさから細石刃核であると思われる。これらは形態等から見て旧石器時代の所産である事は明らかである。

また、隣接する板小屋沢遺跡からも、昭和31年の調査で頁岩を素材にした旧石器が数点採取されている。以上の事から、今回出土した2点のスクレイパーは形態からは旧石器であると特定できるものではないが、石器の採集地点と素材等から旧石器時代のものである可能性が考えられる。

次に、出土した剥片等の特徴から本遺跡の特色について以下に記した。

出土遺物の99%を占める黒曜石の剥片や破片は、ほぼI層からの出土である。定型的な石器は少なく、剥片の一端に僅かな剥離が見られるものや礫皮面を残す粗割程度のものが目についた。器種別の割合を見ると、総点数33,593点中、Rフレイクが80点で最も多く、次に石核が55点、Uフレイクが23点の順である(表I-2)。器種を問わず、いずれも粗雑な加工のものが多く未製品と考えられるものも

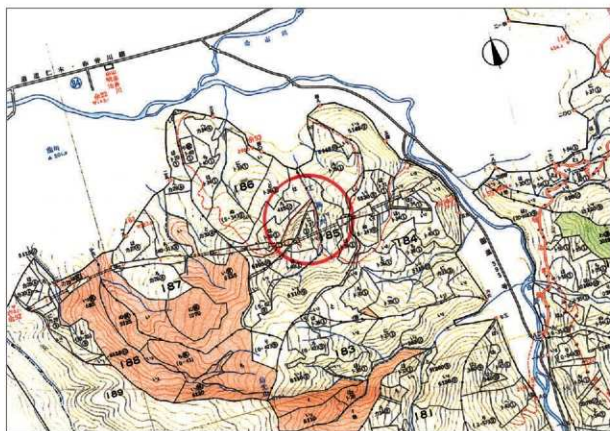
ある。遺構や土器の出土も少なく、本遺跡は黒曜石の剥片や砕片または残核等の散布地である。

このあたりで加工された石器類は他の地域に持ち出された事が推測される。当遺跡の北側には冷水峠があり、これを越えると余市平野に出る。この途中には仁木町管内のモンガク丘陵があって多くの遺跡が立地する。モンガクA・B・Fの各遺跡から出土した剥片石器は黒曜石がほぼ全体を占めている。また、余市湾に近い余市町登川右岸遺跡、大谷地貝塚でも黒曜石の「剥片集中」が出土している。以上の事から、日の出2遺跡周辺が黒曜石の主要な原産地である赤井川と余市平野を結ぶ交通の要所に位置していたことが考えられ、この附近で加工された石器の一部は上記の遺跡群に運ばれていたこと等も考えられる。また、赤井川村の西側にある共和町上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡からも黒曜石の「剥片集中」が出土しており、これらは赤井川産の特徴を持っている。

2 185号林班線採取の黒曜石原石について

赤井川は白滝、十勝三股、置戸とならび北海道の黒曜石四大産地の一つである。白滝の八号沢のような露頭はいまだに確認されていない。しかし、赤井川での黒曜石の供給源が土木沢遺跡周辺であることは知られている。土木沢遺跡は都地区から南へ約4km、標高約600～640mにあって黒曜石の原石や遺物の散布が確認されたために、平成15年に包蔵地として登載された。今回踏査した目的は黒曜石の露頭や岩体の確認にある。185号林班線(図VI-1)は、都地区と土木沢遺跡のほぼ中間地点にあり、山裾に沿うように東西に延びている。この林道は昭和62年頃に開設され、主に唐松を切り出すために作られた。入り口から行き止まり地点までの距離は約4.6km、標高は最大で約300mである。

踏査した結果、標高が低いためか露頭の確認はできなかったものの、流紋岩の可能性のある岩体を確認する事ができた。また、広範囲に渡って黒曜石片の散布も見られた。今回掲載した黒曜石の原石は、工藤沢付近で採取したものである(口絵4-2、図版12-1～4)。採取地点は図の○印内である。原石の計測値は長さ33cm、幅30cm、重さ20.4kgである。(笠原)



図VI-1 185号林班線位置図

(この図は宮林署発行の2万分の1石狩管理署部分「明治9-6」を複製したものである)

写 真 図 版

板小屋沢遺跡 図版 1～4

日の出2遺跡 図版 5～16



1 板小屋沢遺跡調査前状況（西から）



2 板小屋沢遺跡調査状況（南から）



1 板小屋沢遺跡K17土層断面（北西から）



2 板小屋沢遺跡L17土層断面（北西から）



3 板小屋沢遺跡M17土層断面（北西から）



4 板小屋沢遺跡N17土層断面（北西から）

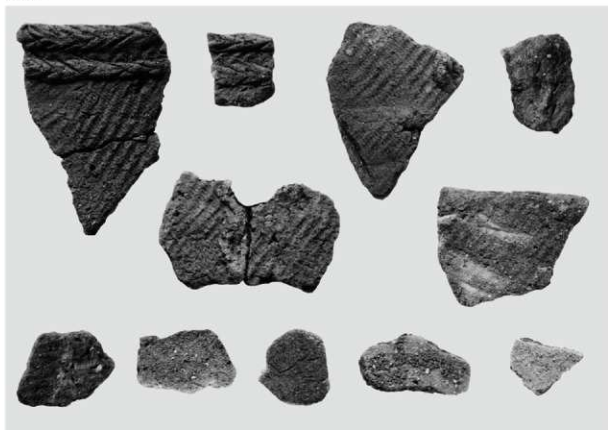


1 板小屋沢遺跡K13・K14土層断面（南西から）

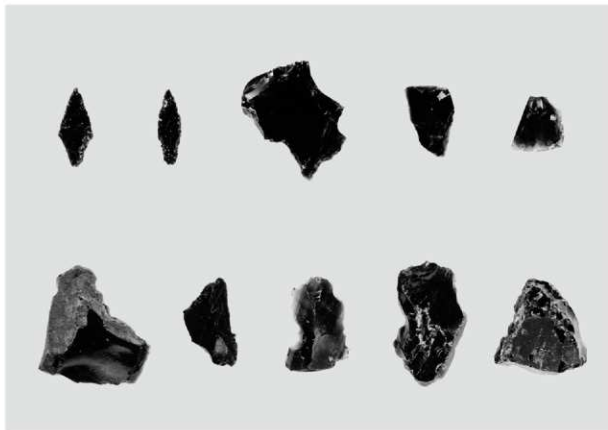


2 板小屋沢遺跡完掘（南東から）

図版 4



1 板小屋沢遺跡包含層出土の土器



2 板小屋沢遺跡包含層出土の石器等



1 日の出2遺跡A地区調査前全景（南西から）



2 日の出2遺跡A地区調査状況（南から）

図版 6



1 日の出2遺跡A地区調査状況（東から）



2 日の出2遺跡A地区G29遺物出土状況（西から）



1 日の出2遺跡A地区トレンチ（東から）



2 日の出2遺跡A地区K33土層断面（東から）



3 日の出2遺跡A地区J34土層断面（東から）



4 日の出2遺跡A地区I35土層断面（東から）

図版 8



1 A地区P-1土層断面（北から）



2 A地区P-1完掘（北から）



3 A地区P-2土層断面（北から）



4 A地区P-2完掘（北から）



5 日出2遺跡A地区完掘（東から）



1 日の出2遺跡B地区全景（南東から）



2 日の出2遺跡B地区K19遺物出土状況（東から）

図版10



1 日の出2遺跡C地区調査前状況（東から）



2 日の出2遺跡C地区調査状況（東から）



1 C地区P-3土層断面（北東から）



2 C地区P-3完掘（東から）



3 日の出2遺跡C地区完掘（南東から）



1 185号林班線



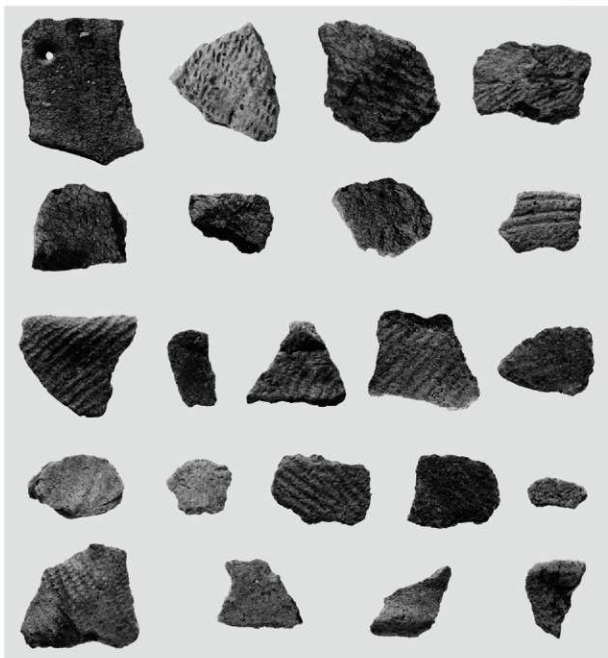
2 185号林班線から工跡をみる



3 185号林班線黒曜石原石採取状況



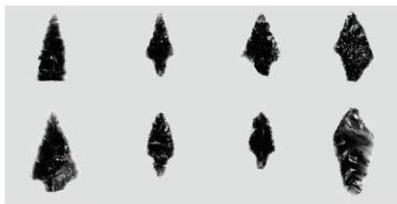
4 黒曜石原石



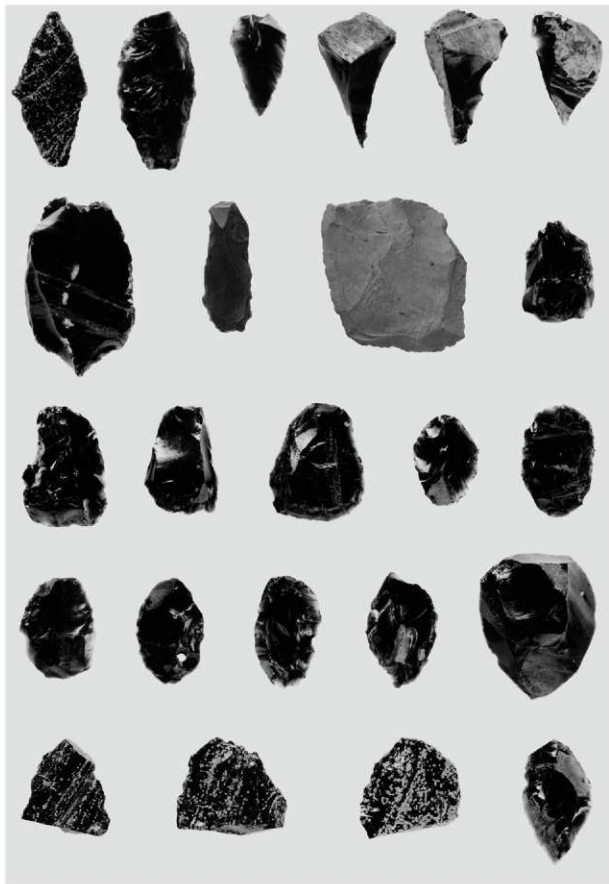
1 包含層出土の土器



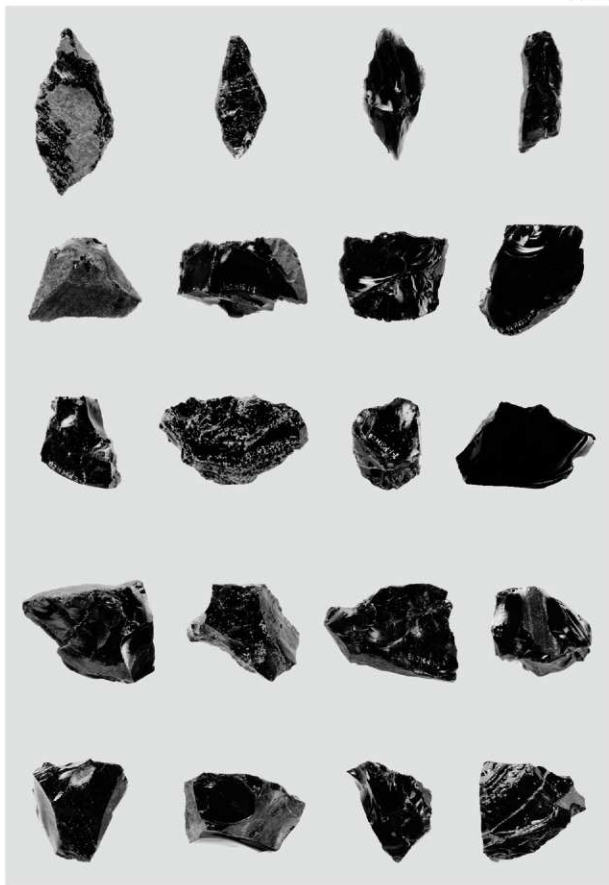
2 P-3 出土の石器



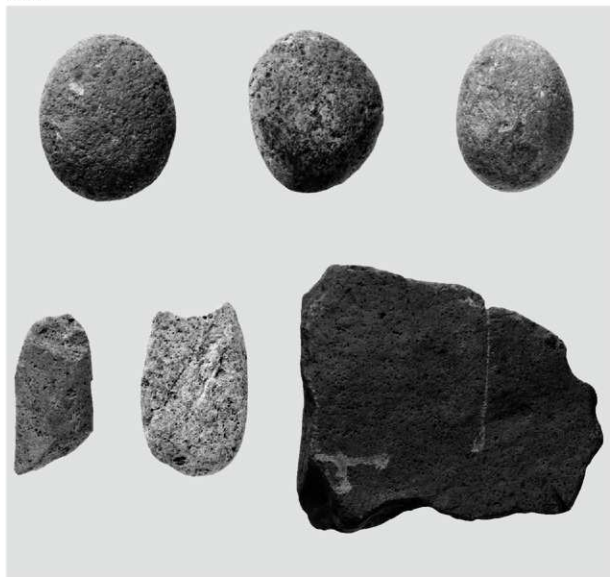
3 包含層出土の石器 (1)



1 包含層出土の石器（2）



1 包含層出土の石器(3)



1 包含層出土の石器（4）

引用参考文献

- 赤井川村教育委員会 2004『赤井川村史』赤井川村
- 赤井川村 2006『第三期赤井川村総合計画』
- 乾 芳宏 1998「余市町大谷地貝塚」余市町教育委員会
- 乾 芳宏 1998「余市町登川右岸遺跡」余市町教育委員会
- 上野秀一・宮塚義人 1976「北海道余市郡赤井川村都遺跡出土の石器群について」『北海道考古学』第12輯
- 太田良平・上村不二雄・大沢 穠 1954「5万分の1地質図幅「仁木」北海道開発庁
- 権子二郎 1926『北海道赤井川カルデラに就いて』古今書院
- 加藤 誠・勝井義雄ほか 1992『日本の地質1北海道地方』日本の地質『北海道地方』編集委員会編
- 木村英明 1978「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」『北海道考古学』第14輯
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『仁木町モンガク丘陵の遺跡群』北理調報65
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町登町2遺跡・登町3遺跡』北理調報67
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2000『赤井川村都遺跡』北理調報150
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2001『赤井川村日の出4遺跡・日の出10遺跡』北理調報161
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2005『共和町リヤムナイ3遺跡(1)』北理調報220
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2006『共和町上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡(2)』北理調報227
- 嶋井康夫 1998『モンガクB遺跡』仁木町教育委員会
- 嶋井康夫 1999『モンガクB遺跡(Ⅱ)』仁木町教育委員会
- 高橋正勝ほか 1982『秩ヶ岡遺跡』江別市教育委員会
- 知里真志保 1956『アイヌ語入門 復刻版』北海道出版企画センター
- 知里真志保 1984『地名アイヌ語小事典 復刻版』北海道出版企画センター
- 寺崎康史 2005「北海道赤井川産黒曜石の産状と旧石器時代におけるその利用」『考古学ジャーナル』1月号
- 寺崎康史 2005「北海道西部の旧石器時代における黒曜石の利用」『北海道旧石器文化研究』第10号
- 永井秀夫編 2003『北海道の地名』日本地名大系第1巻 平凡社
- 永田方正 1984『初版北海道蝦夷語地名解 復刻版』草風館
- 名取武光・松下 亘 1959「余市郡赤井川村曲川遺跡調査報告(第一報)」『北方文化研究報告』第14輯
- 名取武光・松下 亘 1961「余市郡赤井川村曲川遺跡調査報告(第二報)」『北方文化研究報告』第16輯
- 松浦武四郎著・吉田常吉編 1984『西蝦夷日誌』『新版蝦夷日誌下』時事通信社
- 松下 亘 1958「北海道赤井川村の無土器文化調査予報」『石器時代』第5号
- 松下 亘 1959「余市川上流に於ける無土器文化(先縄文文化)の遺跡概観」『ウタリ』第2巻第10号
- 森田知忠 1958『赤井川踏査記』『黒曜石』No.3
- 山田秀三 1984『北海道の地名』北海道新聞社

報告書抄録

ふりがな		あかいがわむら いたこやさいせき・ひのでにいせき						
書名		赤井川村 板小屋沢遺跡・日の出2遺跡						
副書名		余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		北海道埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第242集						
編著者名		遠藤香澄・笠原 興						
編集機関		北海道埋蔵文化財センター						
所在地		〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL011-386-3231						
発行年月日		西暦2007年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
いたこやさいせき 遺跡	よいちごんあかいがわ 村字日の出 197-56ほか	01409	D-20-01	43度 6分 22秒	140度 49分 33秒	20060703 ～ 20060929	600㎡	道路建設 工事に伴 う事前調 査
ひので 遺跡	よいちごんあかいがわ 村字日の出 313-4ほか	同上	D-20-06	43度 6分 25秒	140度 49分 17秒	20060703 ～ 20060929	2400㎡	同上
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
板小屋沢 遺跡	遺物包含地	縄文時代 中期			縄文土器 13点 (中期) 石鏃、石錐、Rフレ イク、フレイク、石 核等 459点			
日の出2 遺跡	遺物包含地	縄文時代 中期	土坑	3か所	縄文土器 76点 (早・中・後期) 石器等 33516点 (石鏃、石錐、スク レイパー、石核、た たき石、すり石、台 石、黒曜石のフレイ ク)			

財北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第242集

赤井川村 板小屋沢遺跡・日の出2遺跡

—余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成19年3月27日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 柏楊印刷 株式会社
〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号
TEL (011) 789-2377 FAX (011) 789-2376